勿来工業高等学校建築科ＯＢ会
http//nakoso-ob.com/

事務局だより

発行日
平成30年3月31日
第 24 号

発行所
いわき市石森二丁目1-13
事務局　千葉良司
TEL 0246-35-0631
FAX 0246-35-0632

発行者
勿来工業高等学校
建築科ＯＢ会
会長　千葉良司

No.	行事名	日付	場所	参加者
1	幹事会	2017年4月26日	労働福祉会館	5　名
2	総会	2017年6月24日	いわきワシントンホテル	40　名
3	幹事会	2017年10月18日	労働福祉会館	8　名
4	新年会	2018年2月3日	ホテル　ミドリ	10　名
5	設計コンペ審査会	2018年2月17日	労働福祉会館	6　名
6	同上表彰式	2018年2月28日	勿来工業新校舎会議室	5　名

**********No.1幹事会**********

幹事会	平成29年4月26日（水）18：00～20：00 いわき市平　労働福祉会館　会議室		
小林仁　5	福富大祐　7	千葉良司　10	佐藤敏男　12
高原典宏　14			

４月２６日、水曜日、午後６時から幹事会が開催されました。午後６時の時点で出席した役員は、福富会長、小林仁会計監査、高原事務局長、それに私の４人でした。早速４人で幹事会を始めることになりました。この日の議題は、６月に開催される総会についての内容の確認です。準備して来た総会冊子を元に、高原さんが内容を読み上げていきました。１ページは総会次第の役割分担です。これは昨年と同じ人が行うことで確認しました。２ページは事業報告。３ページは収支決算報告。４ページは会計監査報告。ここまでは、昨年度の結果報告なので問題なく確認が終わりました。５ページは収支予算ですが、前年度と同じ予算に対して、部分的に増額したいとの提案がありました。設計コンペに掛かるものの検討をして、予定より３万円増額する提案をしました。その他事務局だより、事務局費についても増額の提案を行い総会に掛けることになりました。６ページは役員改選です。今年は会長が入れ替わる案を総会に掛けることになるようです。その他副会長、事務局長も新しく替わる案を総会に掛けることになりました。９ページは学校教諭紹介ですが、今年は教頭先生が一人入れ替わりました。荒川俊一教頭が他校へ移り、数年前に建築科の科長を務めていた田畑淳様が平工業の教頭から勿工の教頭として着任することになりました。田畑先生は勿工建築科長時代、熱心に生徒たちを導き、またＯＢ会に対しても親交を深めていました。教頭としてではありますが、建築科の授業も受け持つことになるようです。総会の内容についての確認作業が終わり、総会案内通知の準備について話し合いました。通知は各回生の幹事に封筒で郵送し、中身は、総会案内、回生毎の名簿、事務局だよりを同封することになりました。名簿については、個人情報のため内容について慎重に取り扱うことになりました。通知するための封筒セット作業を５月２７日、土曜日に福富会長の事務所で数人が集まって行うことになりました。総会の内容の確認と通知の段取りを行って幹事会を終了しました。最終的に佐藤敏男さんも参加しての５人での幹事会となりました。２時間かけて行い、その後労働福祉会館の向いにある「ぼっけもん」という居酒屋で福富さん、佐藤さん、高原さん、私の４人で懇親会を行いました。千葉良司

**********No.2総会**********

総会	平成29年6月24日（土）17：00～20：30 いわき市平　いわきワシントンホテル	
来賓	富樫要次様　元建築科長	松崎彰彦様（教頭）
	田畑　淳様（教頭）	高瀬善溢様（同窓会会長）

櫛田	常雄	1	鈴木	正吉	1	箱崎	征孝	1	北郷　哲夫　3
篠崎	良司	3	本田	傳	3	酒井	晃	5	小林　仁　5
嵐	繁雄	6	高橋	貞徳	6	仲居	二郎	6	石山　圭一　7
志賀	利光	7	福富	大祐	7	鈴木	俊美	10	佐藤　政和　10
佐藤	政春	10	鈴木	秀明	10	薗部	好正	10	千葉　良司　10
村谷	徹	10	中田	明	11	渡辺	久	11	石川　利幸　12
佐藤	敏男	12	高原	典宏	14	遠藤	誠	18	佐藤　博史　18
鈴木	忍	18	田中	英正	18	緑川	章	18	四家　康正　21
橋本	浩喜	25	佐藤	則之	31	鎌田	耀	51	菊池　李玖　53

総会報告　千葉良司

６月の時期、関東地方まで「梅雨入りしたとみられる」という気象庁の発表の後、東北地方が梅雨入り宣言をされたのは、それからしばらく経ってからでした。それでも今年の梅雨は晴れ渡り、気温の高い日が続くこの時期にいわき市平ワシントンホテルでは、第２５回勿工建築科ＯＢ会の総会が開催されました。卒業回生は５４回生となり、２０６９名の卒業生を世に送り出した歴史を持つ学校の建築科となりました。出席者は１回生から５３回生と、幅広い年齢層が集まりました。今年の総会は２年に一度の役員改選の時期でありますが、役員に変化のある総会となったようです。司会は鈴木忍さんの予定を変更して２１回生の四家康正さんが初めて行いました。総会開催宣言がされると、福富大祐会長が挨拶をし、渡辺久さんが議長を務め総会が進行していきました。総会次第に従い、事業報告、決算報告、監査報告、事業計画、収支予算に関する件をそれぞれ審議し滞りなく可決されました。そして役員改選の議事に関して事前に出していた案を高原事務局長が読み上げて行き、審議され可決されました。大幅な変更点は、会長が私（１０回生千葉良司）になり、事務局長が２１回生の四家康正さんになったことでした。私は総会閉会宣言で今まで会長を務めた福富さんへの感謝の気持ちを述べそして閉会となりました。

ＯＢ会会長総会挨拶

７回生　福富大祐さん

皆様には総会ご出席誠にありがとうございます。ＯＢ会卒業生は今年で５４回生です。会員数総勢２，０６９名。今年の総会にも改めて新会員を歓迎いたします。昨年から会員数が２０００名を超えまして、各回生の幹事に総会出席者の取りまとめをお願いしているところであります。まだまだ試行錯誤の状態ではありますが、徐々に浸透しているように思います。当面このシステムを継続したいと思いますので皆様のご協力お願いいたします。

昨年は第二回ゴルフコンペが開催されました。大勢の会員が参加されまして大賑わいであったようです。取りまとめ役の１８回生の皆さん大変ご苦労様でした。

毎年卒業設計コンペをＯＢ会が主催しておりますが、今年の作品は今までになく格式の高い見応えのある作品が多く出展されました。県内の建築科の合同作品展が数年前から開催されておりますが、その中でも勿工は高い評価を受けております。私たちから見ましても非常にレベルが上がってきまして、審査会

を通じて作品を見てみますと、確実に生徒たちが育ち表現力を付けていることを実感いたしました。

震災から６年経ちまして、いわき市も復旧から復興というステージに変わってきております。ＯＢ会は発足の櫛田初代会長から始まり私は、震災を挟みまして足掛け８年間を５代目として引き継いでまいりました。その間、同窓会の連携、事務局の軽減化に努力してまいりました。学校の方は、震災もありまして学校の改築、旧校舎の復旧工事もありました。更には、昨年新校長として転任された富樫実先生は、富樫元科長のご長男でありまして、世代交代が確実に進んでいることを実感しております。

お願いがあります。震災をきっかけに、建築科の卒業生が地元の建設会社に就職する数が圧倒的に増加しております。我々としても学校としても有り難いことであります。このように後輩たちが身近に育って行っておりますので現場などで見かける機会がありましたならば、気軽に声を掛けて励ましていただければと思っております。

今年は新しい時代を開くために後身に席を譲りたいと思っております。皆様には、今までのご尽力とご協力に感謝するとともに、震災もある程度落ち着きつつあると言うこともありまして、新たなＯＢ会の歴史のページを開きたいと考えております。この後の総会の慎重審議、宜しくお願いいたします。ＯＢ会のご厚情に感謝しつつ総会の挨拶といたします。本日はありがとうございました。

ＯＢ会総会閉会の言葉

10回生　千葉良司

このたび６代目会長に就くことになりました１０回生、６２歳千葉良司です。この総会が終わるとＯＢ会は、新役員体制で運営していくことになります。今日の総会まで８年間、安定したＯＢ会を運営してきた福富大祐会長に感謝の気持ちを伝えたいと思います。福富さんが会長に就任した当時、私は事務局長をしていました。ＯＢ会の運営にあたって、例えば「何日に新年会があるので、通知の挨拶文をお願いします」と連絡をすると、その数時間後にはワードで作成した文書がパソコンに送信されていました。対応が早く、事務処理の流れが速やかでした。総会の議案は、幹事会で入念に検討して議案を準備するわけですが、その時も、いいものと悪いものを判断し、そして回答を導いたのも福富会長でした。本当にこれで大丈夫かというところまで深く話すことができました。そのようにして、毎年総会の準備をしてきました。また会合の後の懇親会では、自分の貴重な経験談を話してくれました。困難な状況に立たされた時に対して、切り抜けた貴重な体験も話してくれていました。懇親会の最後にはいつも会長がみんなの飲食代を払ってくれました。また別な場面ですが卒業設計の作品を審査するときや、総会通知をするための封筒セットの作業をするときは、福富会長の事務所で行うわけですが、２時間ほどの作業が終わると、福富さんの奥さんがみんなに弁当と味噌汁を準備してくれます。そしてお茶を入れ、最後にコーヒーを振る舞ってくれます。毎回そのようなおもてなしを受けながら会長とお付き合いさせていただきました。会長は自分の愚痴は言わない、相手の話は熱心に聞いて答えてくれる。そんな印象を私は持っています。長年会長とお付き合いする中で、ある日会長の健康面に対する心配を持つようになりました。今度手術することになったとか、ひざが思うように動かないといった悩みを聞く機会がありました。そんな体で何人も従業員を抱えた、いわき市でトップクラスの設計事務所も営んでいます。ＯＢ会に対する精神的な負担が大きかったのだろうと考えていますが、ＯＢ会を第１に考えていたことも感じていました。今回その会長職を退くわけですが、次年度からは直前会長という役職で役員参加を継続いたします。今日まで一生懸命ＯＢ会に活動してこられた福富会長に感謝の気持ちを伝えたいと思います。福富会長、８年間安定した会長職ご苦労様でした。そしてありがとうございました。これで第２５回総会を閉会いたします。

ＯＢ会会長　懇親会挨拶

７回生　福富大祐さん

先程の総会議事、役員改選にて無事千葉新会長に席を譲ることになりました。この挨拶は千葉新会長にやってもらうつもりでしたが、先程の千葉さんからの過分なご挨拶を頂いてしまったので最後に私が務めさせていただきます。ＯＢ会総会は２５回になります。初代櫛田会長、本田会長、高杉会長、嵐会長と続いたあとに、私が５代目会長として承りました。たまたま東日本大震災を挟んだ結果、学校も変わり、いろんな状況が動いておりました。落ち着くまでと思っているうちに足掛け８年務めさせていただきました。私は今年６５歳です。引退の時期を去年から考えておりまして、千葉さんにお願いすることになりました。皆さんどうぞ千葉新会長の元にこれまでと変わらぬご協力とご尽力を賜りたいと思います。ＯＢ会がこのようにしてあり続けることがやっとこの年になって有難さを実感しております。いわき市内の建設現場へ行くと後輩を見ない現場はありません。総勢２０００名の卒業生は、いわきの建築というものに対して大変な基盤を作ったんだなと改めて実感している次第です。先輩諸兄、今までの苦労大変だったろうと思っております。ひとつだけ思い出すことがあります。本田傳さんが会長の時、ＯＢ会東京支部へ富樫先生を同伴して行った記憶があります。その時上野の不忍池の近くのホテルで集まった時の話の中で、名も知れない勿来工業高校の建築科というものを富樫先生と故森先生とが泊まりこんで東京の企業に就職活動をされたという写真とお話を伺いまして大変なご苦労があったことを知りました。そこから始まって今があると思っており、先輩諸兄、歴代先生が築いてくれた建築科の歴史と言うものを恩恵に預かりながら更に今後ますます基盤を発展させていきたいと思っています。長い間お世話になりました。そして千葉新会長宜しくお願いいたします。今日はありがとうございました。

松崎教頭先生　ご挨拶

いつも本校の教育活動にご協力誠にありがとうございます。ただ今ご紹介に預かりました教頭の松崎と申します。今年３年目になります。３年目になり学校にも慣れ、諸先生や生徒たちと楽しく日々を過ごしております。さて学校の方ですが、最近目覚ましいと思うものは部活動ではないかと思っております。空手部、ウエイトリフティング部、バレー部そしてバトミントン部、卓球部、柔道部、水泳部とまだまだありますが、支部大会、県大会と素晴らしい成績を収めております。東北大会出場も決まっている部もあります。その中でも皆様もご存じではないかと思われますが、高校夏の県大会で我が野球部の主将である「齋藤亜斗夢」君が選手宣誓を行うということに決まりました。このことで学校全体の士気が上がっております。これを機に上位に上がっていただいて、（甲子園に）行ってもらいたいなと思っています。今年は学校全体で野球の応援を考えたいと思っているところであります。

さて、７月１日になりますと各企業からの求人が開始になります。最近非常に景気がよろしくて、地元企業からも非常に評判がいいようです。今年も学校側は多くの求人を見込んでおり

ます。勿来工業は、地元産業の担い手を育成するという目標を掲げまして手厚い指導を加えております。早い時期に各生徒の希望進路実現１００％を目標に学校全体で取り組んでいるところであります。このような状況の中で、勿来工業高校の問題点について追及してみましたところ、勿工独自の魅力というものを引き出して外部に発信していくべきなのかと考えております。現在の中学生が勿工進学の増加を目指して、魅力あふれる学校造りに努力していく考えでおります。これを実現するためには、ここにいらっしゃいます皆様のご支援、ご協力がなければ魅力ある学校造りに繋がっていけないと思っております。これからも今まで通り勿工の発展を願いまして皆様のご支援ご協力を賜りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。また今年は、新校舎になって初めての文化祭を予定しております。生徒たちの活躍や学習の状況を見学する機会ではありますが新校舎に入っていただいて、雰囲気を感じていただきたいと思っております。

田畑淳教頭先生　ご挨拶

本年度より勿来工業高等学校の教頭として赴任してまいりました田畑淳と申します。よろしくお願いいたします。平成２０年に平工の土木科の科長から勿工の建築科の科長として来ました。そこから３年８か月、平成２３年８月まで勿来工業に席を置かせていただきました。平成２０年から２２年まで科長を務め、２３年から教頭として転勤ということでおりましたが、ちょうど３月に震災がありまして、人事凍結ということで８か月間宙ぶらりんの状態で席を置かせていただきました。今工業化学にいる、吉田敦子先生が私の代わりに建築科に常勤講師として来て教鞭を取っていました。その間私の存在が余分なものがいるという状態でした。３年間建築科長として勤務していた時は、ＯＢの方に大いに助けていただいた思いでいっぱいでした。いろんなことを教えていただき、いろんなことを助けていただきました。温かいＯＢ会だなとしみじみ思っております。私は土木の人間ですが、あの３年間で建築の勉強をさせていただいたと言うことで、人生楽しみが増えました。神社へ行っても町へ出ても見る視点が変わって来て、未熟ではありますがそういうものに興味がわくようになってきたので、あの時の３年間は本当に自分を豊かにしてくれた３年間だなと思い起こしております。勿来工業高校の現状と課題については松崎教頭の方から報告がありましたので私からは控えさせていただきます。地域を支えていくのは、勿来工業の建築科であり、建築科自体いわき市に１つであり、浜通りにでさえ１つしかない貴重な存在であります。この地域を支えていく人材を輩出していかなければなりません。今度は教諭から教頭という立場は変わりましたが、学校全体を見ながら建築も見なければならないのですが、機械、電気、電子、工業化学を見ながら地域に愛される学校にしたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。今日はお招きいただきありがとうございました。

高瀬善溢同窓会会長　ご挨拶

ＯＢ会総会に皆さんにお目にかかるのは、今日でちょうど１０回目になります。１０年前、当時の同窓会会長だった福富大祐さんから受け継ぎました。今の生活の中で毎年のＯＢ会総会で皆さんに会うことが楽しみの一つとなっております。同窓会の方は、同窓会をどのように運営していくかが大きな課題になっております。ＯＢ会の様子を参考にしながら同窓会を考えていきたいと思っており、ＯＢ会の皆様には大変お世話になっております。ＯＢ会の皆さんに会うたびに元気を頂いております。先程の教頭先生から学校の見学会の機会を作りたいという話が出ました。昨年もこのＯＢ会総会の場で提案いたしましたが、叶えられませんでした。今年は文化祭もありますので是非実行したいと考えております。大勢の皆さんが足を運べる環境を作っていきたいと思っております。皆さんとの出会い、同窓生との動行を大切にして、半世紀を超えた歳月は、仕事に一区切りがつき同窓会に協力してくれる方を期待しながら、そして皆さんからの知恵を提供していただきながら充実した同窓会を目ざしていきます。本日総会に招いていただいて、皆さんの元気な顔をみると、私もまだまだ頑張らなければならないという思いに駆られました。これからも同窓会とお付き合いいただきますようお願い申し上げます。

富樫要次元科長　乾杯

私は昭和３７年から３０年間この勿来工業高校で努めてまいりました。これからもみんな、お互いに一生懸命頑張りましょう。乾杯

１回生　箱崎征孝さん　中締め

先程の総会議事の中で、長い間会長を務めてこられた福富さんが会長職退任ということでご苦労様でした。そして新会長になる千葉さん、これからのＯＢ会の益々の発展を心からお祈りいたしております。学校の報告では、いろいろな活動、活躍をされていると言うことをお聞きして、私なりに安心しております。益々活躍されることを期待しております。それではここに参加のＯＢ会の会員の皆様のご健康とご多幸をお祈りいたしまして、三本締めで締めたいと思います。本日はありがとうございました。

懇親会報告　千葉良司

総会のテーブルは会議用の３名用長テーブルが４セット５列に配置され６０名分の席が準備されていました。この日の参加予定者は４０名。「懇親会から出席します」と事前に連絡があった会員もいて総会に準備された席は空席が目立った会場でした。約１時間の総会の審議が終了すると、午後６時からは懇親会となりました。総会とは別に事前に準備されていた会場には、円テーブルが４セット配置され、１０名が１テーブルを囲む形で懇親会を迎える準備ができていました。司会はここ１０年以上変わることのない、１２回生の佐藤敏男さんが行いました。総会で挨拶した福富会長は、場面を変えて懇親会用の挨拶をしました。続いて学校からの来賓である教頭先生２名の挨拶と、毎年総会に出席している同窓会長が挨拶をしました。（挨拶については全文を掲載しました）４名の挨拶が終わって２０分程経過しましたその後に、皆さんが待ち望んでいた乾杯を来賓でご長老の富樫先生が行いました。いつも簡単な言葉と乾杯の掛け声ですが、８２歳の年齢で毎年元気に参加して頂いています。皆さん立上り注がれたグラスを片手に持ち大きな声で一斉に「乾杯」の掛け声と拍手があり、約２時間の懇親会が始まり、４つのそれぞれの円テーブルで懇親を深めました。終盤には、勿来工業高校の校歌を５回生の小林さんと６回生の嵐さんの音頭で合唱しました。続いて１８回生から５３回生の出席者７名が音頭を取り建築科応援歌を皆で歌いました。中締めは、昨年も仙台から総会に出席してくれた１回生の箱崎さんが務め、挨拶をしたのち、三々七拍子の３本締めの音頭を取り午後８時半、第２５回総会、懇親会がお開きとなりました。昨年の総会、懇親会出席者５５名に対して今回は４０名と若干少ない参加人数でした。しかし学校等からの来賓の方や、１回生から５３回

生の幅広い年代での開催となり充実した会が行われました。

***********No.3幹事会**********

幹事会	平成29年10月18日（水）18：00～20：00 いわき市平　労働福祉会館　会議室		
鈴木茂信　4	小林　仁　5	福富大祐　7	千葉良司　10
渡辺　久　11	佐藤敏男　12	高原典宏　14	四家康正　21

新会長挨拶

１０回生　千葉良司

今日は、お忙しい中、貴重な時間を割（さ）いて集まって頂きありがとうございます。毎日、朝から仕事に追われ、やれやれ今日も1日が終わったと夕食を取り風呂に入って、お酒を飲んで寝て、また次の日も同じことが繰り返される中、たまには、このようなOB会の皆さんが集まり、共通の話題について討論し合い、終われば懇親会で近況報告など行い、いつもとは違う夜の過ごし方もいいのではないでしょうか。

先日の6月24日土曜日の総会では、役員改選があり、大きな変更点として会長と事務局長が変更になりました。総会出席者の会員の皆様から同意を頂きましたので、今日の幹事会から新しい執行部として活動することといたします。今後も今までと変わらない積極的な会の参加と皆様のご協力をお願いしたいと思います。

さて、今日の幹事会のテーマは、総会の反省会ということが話し合いの中心になると思います。改善点や今後の総会が今以上に発展されるような考えがありましたら、この幹事会で提案して頂きたいと思います。

それでは、新事務局長の四家康正さんに進行をゆだねます。よろしくお願いいたします。

<<<<<<<幹事会報告>>>>>>>

四家事務局長の進行により準備されたレジュメに従い議事が進行されました。最初に会長（千葉）より総会と懇親会の内容について報告がありました。そのまま続けて、昨年度の決算に対して今年度の予算の検討を行いました。この幹事会に準備した昨年度の決算表に対して予算、特に収入が思うような数値が期待されないことを報告しました。この予算不足をどのようにして補うかを検討しました。地元企業に声かけをして、協賛の協力をお願いする。協賛に協力して頂いた企業に対して返礼品を付けてはどうかという意見が出されました。毎年卒業設計コンペに対してＯＢ会が関わり、Ａ５版サイズで作品集をまとめた冊子を作成し、卒業生全員に配布しています。その冊子を付けてＯＢ会の活動の一つが各企業に紹介できます。冊子作成が検討されることになりました。協賛金の具体的な集金方法などは、今後の課題となりました。次に今後のＯＢ会の活動行事（新年会、審査会、表彰式、幹事会、総会）を確認して日程を確定しました。幹事会に集まった８名で意見が出され新執行部としてスタートし午後６時から２時間を費やして、今後の活動内容が確定されました。

*********No.4新年会**********

新年会	平成30年2月3日（土）17：00～19：00 いわき市植田町　ホテル　ミドリ		
嵐繁雄　6	志賀利光　7	福富大祐　7	千葉良司　10
渡辺久　11	佐藤敏男　12	高原典宏　14	鈴木忍　18
四家康正　21	橋本浩喜　25		

年が開けてＯＢ会最初の行事である新年会が植田駅前のミドリホテルで行われました。会員１０名男子のみの会となりました。長老は６回生６６歳嵐さん、年少は２５回生４８歳橋本さんと言う１８歳の年代の差を持って参加されました。事務局長の四家さんの進行により会が開かれ、新会長となった私が会長の挨拶を行いました。レジュメを準備してそれに従いながら、続いて事務局から今後の行事を披露してみんなに確認してもらいました。乾杯を前会長である福富さんが行い、１０個のジョッキに注がれた生ビールを片手に景気よく「乾杯」のかけ声とともに飲食会が始まりました。会場は、畳敷きの和室の部屋に座卓が３個、座椅子が１０個並べられ１０名が座布団に胡座

をかいて腰を落ち着かせ、ホテルで準備したお酒と料理を頂きました。料理はあんこう鍋、前菜、ノドグロの煮魚、茹でたらば蟹、刺身、うどん、フルーツなどが次々と運ばれ喉元を楽しませていただきました。

新年会　会長挨拶　　１０回生 千葉良司

建築科ＯＢ会の皆様、新年あけましておめでとうございます。これから２月、３月と年度末に向けて大変忙しい時期を迎えることかと思います。そんな時期の貴重な時間の中ここにお集まり頂きましてご参加された皆様に感謝申し上げます。ＯＢ会の活動ですが、今月２月は年間を通して出動回数が一番多い月かと思います。新年会があり審査会があり新入会員の入会式・表彰式が待ち受けています。今月９日からマルト中岡店にて卒業予定の生徒たちの展示会が予定されております。今年の３年生の作品を期待したいと思います。昨年の１１月には大阪芸術大学グループが主催するコンペに応募した勿工建築科から２名、当大学での授賞式に参加し、そのうちの山岸蓮弥君が特別賞を受賞したようです。大学が主催するコンペに積極的に参加する学校側の教育方針も生徒たちに建築の知識や感性を育てたいという真剣な姿勢の表れを感じております。大阪へ行かれた生徒の旅費の一部をＯＢ会から支援させて頂きました。１７日には卒業設計コンペの審査会を労働福祉会館で午前中３時間を使って行う予定です。会場が広いので作品を見たい方は足を伸ばしてはいかがでしょうか。　昨年の１２月には、残念な出来事がありました。毎年欠かさず新年会と総会に出席されていた、富樫先生がお亡くなりになり、大勢の方が参列されご焼香には多く時間を費やされました。これは勿工建築科の１回生から長年、生徒たちを支えてこられた実績の表れであると感じました。去年の新年会と総会に普通に元気な姿で出席していましたが、急変してしまったようです。しかし晩年、しっかりした心身を維持していたことは、なによりもいい人生だったのではないかと、勝手に想像しております。今後は参加が不可能となった富樫先生のご冥福をお祈り申し上げます。　今日は節分、明日は立春、暦の上では春ですが、まだまだ寒さと雪に悩まされる時期が続きます。くれぐれも身体には気をつけながら、ＯＢ会を盛り上げていこうではありませんか。

新年会　巷の話

Ｆ：福富大祐さん　Ｓ：志賀利光さん　Ｓａ：佐藤敏男さん
Ｃ：千葉良司

今年は出席できなかった富樫先生の話題が上がった。去年は富樫先生が新年会に出席して元気な姿を見せてくれました。昨年のこの席で久さんから富樫先生に熱いメッセージを送りましたね。そして最後まで私たちを見守ってくださいとお願いしていたよね。富樫先生の実家は郡山ですが、お墓はいわきの地元に求めたようです。奥さんの実家は二本松だそうです。

Ｆ：踏み台昇降が半年続いている。踏み台の上り下りを１００回毎日の日課にしている。そろそろ２００回に挑戦しようと思っている。今は左右５０回を上り下りしている。これをやるようになって調子が良くなってきた。最近は１日おきにやるようになった。それは飽きてしまうのを阻止するため。いままで膝の痛みに悩んでいたのが、これをやるだけでこんなに簡単に調子が良くなってくることにびっくりしている。実は、膝の痛みで歩くことができなくなり病院へ行って膝の水抜きを２回行った。

Ｃ：私も膝の痛みに悩んでいた。踏み台昇降を継続している。最近は左３００回右３００回行っている。とても毎日調子がいい。散歩をしていても膝に負担が掛からなくなった。足が軽く動かせるようになった。自信がついたので、昨年の夏、息子たちに案内してもらいながら吉田ルートからの富士山登山を成し遂げた。朝いわきの家を出て、午後に富士山の麓の駐車場に車を止めて、シャトルバスで５合目まで行った。頂上に着いたときの御来光と雲海が拝礼できるとこと期待して時間を調整して夜８時から五合目を出発した。一気に頂上まで登り、休むことなく下山して、そのまま車に乗って運転を３人で交代しながらいわきに戻ってきた。富士山登山は２度目は無いと思います。世界的に有名な富士山、登山者が半端の数ではない。頂上付近になると人が詰まって前へ進むことができない。それだけの人間に対するトイレの問題が深刻だ。あの山は遠くから眺めるのが一番美しく見る方法かと考えた。

Ｓ：トイレの問題が解決されないので富士山は世界遺産に登録されなかった。自分の大小便の始末は、袋に入れて持って帰ってくるのが登山のマナーだ。自然に帰る物は、その場においていってもいいというのは大きな間違いだ。高校時代、海水浴場でバイトをしたときに、客の残したゴミを毎日砂を掘って埋めていた。それが自然に帰ってきれいな砂になることはありえない。

Ｓ：今度ＯＢ会で登山の企画をしたらいいと思う。７回生の佐藤和夫に案内してもらう。彼は登山のインストラクターだから。平田村の蓬田岳がお勧めだね。

Ｃ：ゴルフはできないけど、登山であれば活動できそうですね。ハイキング程度の体力消費で楽しめそうです。登山は引退したときのライフワークにしたいと思います。

Ｓ：３月１日は普通の人の卒業式。俺は４月１５日が卒業式だった。出席日数の不足が卒業を遅らせてしまった。１ヶ月半を学校に通い、校庭の草むしりや漢字の練習をさせられた。卒業後の進路は、先生が見つけてくれた。東京の石材を扱う会社に入社した。そこで最高裁判所の外壁材に石が採用になりその工事に関わった。両親が病に倒れて会社を辞めていわきにもどってきた。太平住宅の施工図を書いたりしながらのアルバイト生活をしているところに泉石材という会社に入ることになった。その当時石を材料にした建築の仕上げ材はなかった。当時は人研ぎやテラゾといった物だけだった。そこに石を仕上げ材にしてはどうかという提案を持ち上げた。その後、石は普通に仕上げ材として使用されるようになった。

Ｓａ：Ｓさんは頑張って２級建築士の免許を取得した。Ｓさんの自宅設計を私（Ｓａ）が描いて、確認申請の受付をするときに、設計事務所を通さずに自分の住む家を自分で設計したことにして建築指導課へ私（Ｓａ）が同伴で行った。審査が終わって、審査員が「地図を出して」とＳさんに言うと「先輩に向かって出せだと！」と審査員に聞き返した。当時Ｓさんの同級生も指導課で業務をしていたので、その対応に慌てて飛んできて、Ｓさんの同級生が対応した。審査した人も勿工建築科の後輩だった。

**********No.5設計コンペ審査会**********

設計コンペ審査会	平成30年2月17日（土）９：00～13：00 いわき市平　労働福祉会館３階和室		
福富大祐　7	千葉良司　10	高原典宏　14	四家康正　21
橋本浩喜　25	浦木祐作　33		

２月１７日土曜日午前９時から、いわき市平の労働福祉会館３階和室にて、今年度の卒業生の設計作品の審査会を行いました。審査員６名が出席して３７名の作品を拝見しました。審査の前に作品３７点全てを写真に収めました。作品の写真撮影に当たっては、Ａ１のサイズが収まる衝立を準備して作品の下部に当たる部分の衝立に細い釘を打ち、その釘に作品を載せ、作品の

上部に当たる部分の衝立には、セロテープを両面粘着にして貼り付け、作品を垂直に固定して、２人掛りで作品の設置しそして撮影をしました。撮影が全て完了すると、会場が和室のため畳敷きに作品の全てを並べて拝見することができました。６人が１０枚の付箋を持ち、それぞれが１０作品選ぶ作業が始まりました。１巡して全体の作品の完成度を確認して、２巡目に付箋を貼り始めそのときに１０作品全てを選出知ることはできず、３巡４巡５巡と３７作品を拝見し、全員が漸く１０人を決定しました。６人全員の満票が３点、５票が３点、４票が１点、３票が２点、２票が４点、１票が６点、計１９名が選出されました。選出されなかった１８名は、ケースに収められました。選出された１９名から最優秀賞１名、優秀賞３名、佳作３名、特別賞３名の順で決めていきました。「いわきの活性化」というテーマで作り上げていった３７作品について、全員が努力し頑張ってA1サイズのケント紙に表現されていたことを６人の委員が確認しました。１位を獲得した中村さんは、図面の完成度が高く、計画された案が現実に建築したときにいわきを活性化させる良い建物になるだろうと、審査委員が語っていました。図面の構成も模型もうまく表現された作品でした。作品の共通点は、コンセプトを書き、平面図、立面図が計画され、パースについては内観、外観が描かれ、３Dのソフトを使用して着色された作品が作成され拝観している人を楽しませるものが多く見られました。審査会は３時間に及び行われ、２月２８日の表彰式についての打ち合せと役割の確認を行いました。賞状作成、冊子（３７作品と昨年入選者等７２ページ分）作成、副賞（図書カード等）準備をそれぞれに行うこととし、当日は審査委員６名が表彰式に出席することにしました。

**********No.6表彰式・入会式**********

表彰式 入会式	平成30年2月28日（水）12：00～13：00 勿来工業高等学校　会議室			
福富大祐　7	千葉良司　10	高原典宏　14	四家康正　21	
橋本浩喜　25				

２月２８日水曜日正午から、設計コンペの表彰式とＯＢ会入会式が開催されました。次の日に卒業式を迎える建築科の３年生３７名と審査会に関わったＯＢ会の審査員５名、そして先生方６名が校舎１階にある会議室に集まりました。ＯＢ会が設計コンペ表彰式に準備した物は、入選者１０名の表彰状と図書カード、賞状ケース、参加者全員に設計コンペ作品をまとめた７２ページに及ぶＡ５サイズ冊子。そして会議室に集まった全員の弁当とお茶でした。会の進行は、ＯＢ会事務局長の四家さん（２１回生）が行いました。会長の挨拶とＯＢ会の内容の説明を私（千葉）が行いました。挨拶文は、後記に掲載しました。次に入選者１０名分の表彰式を特別賞から行い、最後に勿来一中出身、設計テーマ「夏井川渓谷～四季のにぎわい～」である最優秀賞の中村元大（はると）さんに賞状、ケース、図書カード、作品集冊子が授与されました。続いて高原さん（１４回生）が入選作１０作品について感想を生徒たちに伝えました。前会長の福富大祐さんから卒業されるみなさんへメッセージ（後記参照）が送られました。その後、司会からこの際なのでＯＢ生に何でもいいので質問があれば遠慮無く聞いてくださいと生徒に声をかけました。ある一人の生徒から、「僕は将来事務所を作りたいと思っています。どうすればそれができますか？」と質問がありました。それに対する対応（答えにはなっていないが）を私と福富さんが行いました。また先輩からのアドバイスということで２４回生の橋本浩喜さんからメッセージがありました。表彰式と入会式を終えて、昼食会が行われ弁当を食べお茶を飲みながら卒業式前日の、ＯＢ生と建築科３年生と先生方の一時を過ごしました。

建築科ＯＢ会について

この高校を卒業すると自動的に建築科だけがこのＯＢ会に所属します。皆さんは建築科の５５回目の卒業生となります。勿来工業高校は、１回生卒業から皆さんを含めて２１０６名の建築科の卒業生を世に送り出しました。毎年６月に総会を開き活動内容を報告しております。建築科を卒業した方は全員総会に出席できます。今年も６月に総会があります。総会のお知らせは、このクラスの幹事となった齊藤亜斗夢さんと藤本裕也さんのお二人に届きます。幹事の方は、このクラスの全員に連絡をして総会への参加を呼びかけ出席者を確認し、事務局長へ伝えてください。ふるって参加してくださることを期待いたします。活動の内容は、今回皆さんに配布した冊子に掲載してありますので目を通してください。ＯＢ会の事業の一つに、卒業設計コンペ支援活動があります。皆さんが作成した卒業設計作品を我々が委員会を結成して審査し、そして入賞者には、表彰するということを毎年行っております。それに合わせてＯＢ会の入会式を行い、皆さんの先輩の体験談を伝え、最後に皆さんと先生と我々ＯＢ生が一緒に昼食を取るということを行っています。本日から勿工建築科ＯＢ会の会員になられた皆さん、入会を歓迎いたします。

ＯＢ会　会長挨拶　１０回生　千葉良司

卒業される皆さんへ。明日は卒業式ですね。その前日に皆さんに会えたことを嬉しく思っています。入学してから３年間通い続け、建築の知識を身につけ、卒業設計の作品も完成させ、高校でのやるべきことの全てを終えたことを認めてもらえる日です。１ヶ月後には皆さんが決めたそれぞれの進路を目指すことになります。進学される皆さんは、まだ両親の援助を受けながら生活することになりますね。親から出してもらう学費や生活費を毎日感謝しながら学生生活を送って頂きたいと思います。就職される皆さんには、厳しい実社会が待ち受けています。建築科を卒業する皆さんの中には、建築に関わらない方もいると思います。しかし社会が求めるものは、技術を提供し生産してそしてお金にすることです。職場に入れば新人でも経験者でも同じ環境で仕事をするわけであり、同じレベルのものが要求されます。はじめは戸惑います。専門用語が飛び交い、言葉が理解できない。物の名称が分からない。誰がどんな仕事をしているさえ理解できない。そんな日々を過ごすことになります。仕事が分からず悩まないためには、先輩と頻繁にコミュニケーションを取り得た知識を確実に自分のものにしていく努力が必要です。社会生活のリズムをつかみ、仕事の知識と技術を身につけ、そして体力が付くまで、少なくとも３年間は、やめないで頑張ってもらいたい。その試練を超えれば、自分の明るい未来が見えてくると思います。その日を想像して進んでいくことを期待します。

冬季平昌オリンピックが２月２５日に閉会式を迎えました。

１７日間の開催期間中、日本の選手の活躍が世界中で注目されました。６６年ぶりに大会連覇を果たした羽生結弦のフィギュアスケートは圧巻でした。オリンピック直前に右足首を怪我して練習ができない日々を過ごしながら精神的にも耐え、そして素晴らしい演技で金メダルを獲得しました。最終日にはマススタートとカーリングの金、銅メダルを追加獲得して日本に花を添えました。これだけ活躍できたのには理由があります。選手たちは、国内での練習に止まらず、海外遠征と外国人の監督、コーチの元に技を磨き、またデータを蓄積し、活用し効率のい

い、そして向上させるための方法を考え抜き、いろいろな面を取り入れ偉業を達成したようです。今の時代不可能な物は無いと言ってもいいくらいに物が、システムが、環境が整い始めました。日本経済は、限界のある日本を見据え海外に需要を求め外貨を獲得しています。冬季オリンピックが終わると２年後には夏季東京オリンピックが開催されます。その会場整備に現在建設現場は多忙を極めています。建築科を卒業される皆さんにとって、今の日本の環境を考えると恩恵が無いわけがありません。いわきで暮らすもよし、都会へ出て行くのもよし。そして海外へ行くのもよし。若い皆さんには国境を越えて活躍してほしいと思います。

ＯＢ会　前会長お話

７回生
福富大祐

私は７回生、福富大祐と申します。設計事務所を営んでいます。先ほどの体育館での同窓会会長から同窓会会館の話が出ましたが、その会館の設計も行いました。皆さん、本日は卒業設計コンペで受賞された方、されなかった方、大変ご苦労様でした。作品を見せてもらって、今年は小粒かなと思いながら見ていましたが、よくよく中を見ると個人個人が非常にまじめに真剣に取り組んでいることを感じ取れました。例年に無いナイーブな物であったようです。大変ご苦労様でした。さて「明日から子供ではなくなるよ」と言うことをいつも言っています。今日までは、何かあれば親や学校に転化できました。自分から逃げることが許されました。明日からは自己責任という言葉がみんなそれぞれについて回ります。逃げることができません。そして大事なことは、自分に嘘をつかないことと、相手をしっかり説得することです。建築に携わっている人は説得することがうまいと言われています。福岡伸一という科学者が今有名な熊研吾という建築家に「建築家はどうしてもてるんですか？」と聞いたそうです。フランク・ロイド・ライトは世にも有名なスキャンダルを起こしました。黒川紀章は有名美人女優と結婚しました。熊研吾は謙遜した回答を出すかと思ったが「建築家が持てるというのは事実です。」と答えたそうです。なぜそんなに持てるんですかと問いかけると、「私たちは毎日毎日説得する仕事をやっているんです。まず図面を描いてクライアントを説得する。次にコンプライアンスの問題があるので近隣住民を含めて社会を説得しなければならない。現場に行けば技術者を説得しなければならない。そして最後にマスコミを説得しなければならないんです」。図面や言葉に限らずあらゆる手段を使い説得しなければならないという仕事が女性を説得するのも蓄積した実力の一つであるのかなと福岡さんは思ったそうです。明日から自分の言葉で相手に伝え、しっかりしたコミュニケーションを取りながら進んでいってください。これから社会に出ると建築科ＯＢの方がいろんな職場にいます。そんな先輩に声をかけ頼りにしてください。明日から頑張ってください。

設計事務所を作るまでの過程を教えてください。
福富大祐さんからのアドバイス

高校生でそのようなことを考えると言うことは希なケースかと思います。今の時点でそれを目標に進むのであればいい設計士になれる可能性はあると思います。設計の仕事をするのには何をすればいいですか？と若い人たちに聞かれることがよくあります。そのときには「絵が描けるようにしなさい」と答えます。キャドに頼らず、手書きで線を描きスケッチをする。デッサンで人を表現する技術を磨く。これができるとイメージしたデザインを表現することができるようになります。それが一つ。それから設計コンペやプロポーザルに積極的に参加して自分の考えを表現して、主催者に説得してほしい。たくさん挑戦して落選しても実力が付いてきます。落選して前進します。どうして負けたのかを自分で考える。そうすると勝つときが来ます。建築・設計という物は、社会を見ないと成り立ちません。社会性を学んでください。３０歳前後あたりで実力が伴ってきます。設計士になるためには資格が必要です。苦しい勉強をしなければなりませんが、１級建築士の免許を取ってください。２級建築士とは違った物の見方ができます。そうすれば仕事も自ずと増えてきます。

これより会長呟き

10回生千葉良司

建築確認が取り消し

日経アーキテクチュア
2017-1-12の１２ページの記事より

News
Update
建設中「地下室マンション」確認取り消し
高さ制限に違反、「地盤面の算定に合理性欠く」と東京地裁
10mの高さ制限かかる斜面地

建設中「地下室マンション」確認取り消しの記事をまとめてみた。横浜市金沢区の斜面地に建設中の建物をめぐり、裁判が行われた。第１種低層住居専用地域に、地下を含む５階建ての共同住宅を横浜市内のデベロッパーが、大阪市の指定確認検査機関の国際確認検査センターに確認申請をして、建築確認を行った。争点は平均地盤面の算定方法の正否だった。最高の高さは１０ｍの制限（建築基準法第５５条第１項）がある。建築物の高さは「地盤面からの高さ」（建築基準法施行令２条１項６号）であると定めている。建築主は、斜面の切土後に高さ約３ｍで１ｍ四方の突起状の部分を残した。建築主は、この突起状の部分の上部を平均地盤面を算定する起点となる「地面」として扱った。これにより建物の平均地盤面からの高さは９．９３ｍと算定した。原告（近隣住民）は、突起状の部分は「意図的に偽装された」もので正しく算定すると１０ｍを超えるから違法であると訴えた。東京地裁は、「突起状の部分のみで平均地盤面を代表する地盤面の高さとして取り扱えない」と結論付けて、建設中の建物の確認取り消しを求める原告の訴えを認めた。被告はこの判決に控訴している。写真で紹介している建設中の建物は、ほとんど完成している。確認が取り消された場合を想像してみた。確認の下りていない建物は、当然完了検査を受けることができない。建設中の建物は、建築基準法６条１項、１号（特建で床面積が１００㎡を超えるもの）、３号（木造以外の建築物で２以上の階数を有し、又は延べ面積が２００㎡を超えるもの）に該当し、建築物の申請及び確認が必要である。これに該当する建築物は、建基法７条の６により検査済証の交付を受けた後でなければ建築物の使用ができない。共同住宅であり、賃貸借契約または売買契約は、検査済証がなければできないことになる。ＯＢ会の会員が６人集まった機会に、このことについて記事を紹介してみた。確認が取り消されて使用できなくなった建物の責任は誰が追うことになるのだろうね？と疑問を投げかけた。確認検査機関かな？というと、検査機関は、確認したけれども許可したわけではないから検査機関には責任は発生しないと思うよという意見が出てきた。では誰に責任がかかるかを想定してみた。建築主、設計者。原告が近隣住民で被告が確認検査機関。やっぱり確認検査機関に責任が負わされるのではないだろうか。結論が出ないままとなった。　千葉良司

富樫要次先生お別れ

富樫要次先生がお亡くなりになりました。１２月１６日に勿工の田畑教頭先生より訃報の連絡がありました。死因は年齢によるものと想像いたします。この年の勿工建築科ＯＢ会の新年会と総会に参加されて、ＯＢ会員と酒を酌み交わしたのがほんの少し前でした。とても元気で過ごされておられたようですが、その年に労災病院に入院されたというお話がありました。それを耳にしましたのは１０月に行われたＯＢ会の幹事会の時でした。そしてその日から２ヶ月間の中で変わり果てた姿になりました。建築科の卒業生に相当の人気を維持しながらの人生だったと思います。１８日の通夜には、相当数の卒業生が参列され、ご焼香はたくさんの時間を費やして行われました。１９日の告別式には、ご長男で勿来工業高校の校長先生である実様がご挨拶をしました。実様は、「父の姿に憧れて教師になりました。父を目指したいと思いながらも、未だに父のようにはなれず、父の存在感を思い知りました」と言っておられました。大勢の建築科ＯＢ生とお別れをした富樫先生、残念ですがさようなら。

富樫先生宅訪問

平成２８年１０月１７日（火）

平方面から6号バイパスを南に走らせ、左にウインカーを上げ県道へ行くための交差点で止まった。更に右へウインカーを上げ勿来工業高校方面へと向かった。目的地は、高校時代の恩師の富樫先生の家だ。東田保育園の交差点を右折して更に左折するところまでは記憶にあった。そのように進むが、1回目で先生の家を見つけることができなかった。しかし地域の範囲内にあることは確信している。もう一度そのエリアを走りながら別の枝道を走り何となく記憶が蘇ってきた。そして多分あの家だと思い、車を走らせるとなんとか富樫先生の家の前に到着したようだ。シルバーマークを付けた軽自動車が敷地内に駐車していることを確認して、先生の在宅を想像した。車の時計は１１時１１分を表示していた。車を降りて邪魔な小雨を顔に当てながら玄関へ足を進めた。玄関にはチャイムのボタンがあったが、私はそれを押さず、そっと玄関の引き戸を引いてみた。鍵は掛かっておらず開けることができたので、そのまま「ごめんください」と声を掛けた。「はい」と奥の座敷の方から直ぐに返事が聞こえて、そして富樫先生が出てきた。先生の顔を見て直ぐに「こんにちは、千葉です」と挨拶をした。「おぉー暫くだな」と言って、先生はまた座敷の方へ戻っていき、座布団を持ってきて、玄関の板の間にそれを置いて、そこに座れという仕草をして、私が座り先生も座った。今家のやつがいないけどと言いながら、私に対応してくれた。今年のＯＢ会総会をまとめた冊子を先生に渡した。実は先月２９日に渡すつもりでいたが、その日に渡すことができず、今日まで２週間以上温めてしまった。一度機会を逃すと、モチベーションを失ってしまう。どうしよう。先生に会いに行って私を受け入れてくれるだろうか。誰かに作れと言われたものでもない冊子を作って、それを先生に渡して歓迎してくれるだろうか、などと考えてしまった。しかしモチベーションを高めて行くことを決断した。私がオリジナルで作成した冊子を届けて、それを先生に見てもらいたかった。先生が不在の時のために、また会ったとしても私の考えていることをどれだけ伝えられるかが心配で、手紙も準備していた。２週間以上前に書いた手紙の内容の全部を覚えているわけではないが、自分で書いたその時のことを思い出しながら、片言話をした。先生は今年の２月で８６歳に成ったという。８０歳後半になってもＯＢ会の総会に参加していただき感謝していますと伝えた。元気でいいですね、元気の源は何ですか？先生はそれには答えず、９０歳を過ぎた姉がいるが少しボケが入っている。俺は６人兄弟の末っ子だ。姉が二人と兄貴が３人いた。兄貴たちは、みんな戦争に巻き込まれた。長男はミッドウェイ、次男はガダルカナル島へ行って戦死した。三男は特攻隊に入って、飛行機に乗り出撃したが機械の不具合で戦闘を断念し帰還した。三男は本土に戻りそして終戦を迎えて戦後の生活を送り寿命を迎えた。兄弟で残っているのは俺と姉の二人になった。今は月に一度病院通いをしている。肺に癌を抱えている。そう言ってまた座敷の方へ行き玄関に戻ってくると、印字された白いＡ４サイズの４分の１の大きさの紙を見せてくれた。１０月２５日に労災病院の石塚先生の診断が予定されているものだった。富樫先生が肺がんであるとの情報は既に入っていた。癌が発見されたのは何時でしたか？４年前だ。でも元気で居られる。それは高齢で癌の進行が鈍いからですよね。千葉は幾つになった？還暦を超えて６２歳です。その年にしては若いな。と話をしていると台所から女性の声がした。奥さんが戻ってきたようだ。そして奥さんは、お茶とお菓子を準備して玄関に持ってきてお茶を入れてくれた。奥さんも玄関に座り僕たちと一緒に話に加わった。以前に私が先生の家にお邪魔したのは、平成２４年なので４年前になる。奥さんは、「ＯＢ会の人たちはみんな仲がいいようですね」と言った。それから僕は、「ＯＢ会の総会があるときは、必ず富樫先生がいます。ＯＢ会が毎年、５０名ほど参加するのも富樫先生という存在を意識しているからだと思います。ＯＢ会にとって富樫先生は一つのシンボルです。勿工建築科は卒業生を５３回送り出しました。総会に参加するのは１回生から１８回生までは回生毎に複数人います。しかしそのあとが少人数の参加となっています。この数字の現れは富樫先生の教え子であるかないかによるのではないでしょうか。」と先生と奥さんに説明した。先生は冊子をパラパラめくり写真のページを見つけて自分の顔を見た。そして「俺の顔は年取っているな」と言った。こんなに立派な冊子作って千葉はたいしたもんだな。元気なうちは、ＯＢ会の新年会と総会には必ず顔を出すからな。そう言いながら喜んでいたことを感じた。お昼になる１５分ほど前に先生と話を終え自分の車に戻った。時計を見ると１１時４５分。３４分間、先生と話をしていた。

１０回生千葉良司

固定電話が使えない時代

電話機について考えてみようと思う。先日、ＯＢ会幹事会後の懇親会での話題としてこんな話があった。Ｎ設計に就職した子がすぐに辞めてしまったようだが、その後どうしているんだろうね。とＦさんがＮ設計のＳさんに尋ねた。Ｓさんは、どうしているは分からないが、辞めたいきさつを話してくれた。入社１日目に、その新入生に電話の対応について軽く教育をした。そして事務所にかかってきた電話にその新人が対応した。上手く出来たかどうかについては言っていなかった。しかし次の日からＮ設計に勤務することはなかったようだ。今世界中で使用している携帯電話。それは、個人対個人と対応が直接的だ。先日の日経新聞の記事に載っていたが、就活中の学生に携帯に電話をしても出ないと嘆く企業が多いようだ。電話をする前にラインでお伺いを立ててから電話をする。登録していない相手から掛かって来てもでない。固定電話は出るなと親から教育を受けている。こんな時代になった。用事があれば直接その相手に電話ができる。取り次ぎと言う行為は無くなった。私は６２歳。高校を卒業して設計事務所に就職をした。その時代固定電話しかない。当然入社間もなく電話の対応をする。相手が名乗るが聞き取れない。最初は直ぐに近くにいる先輩に対応してもらった。しかし時の経過とともに電話の対応に慣れてくる。あの時代、頻繁に電話で連絡すると言うことはなかった。今は何時でもどこでも仲間と連絡を取ることができる。コミュニケーションが下手な時代になったと結論付けられるような気がする。

建築基準適合判定資格者検定

受検日
2016/8/26

次男の洋介が福島第一原子力発電所付近の現場に勤務するようになって、朝の早い出勤の生活が始まった。今年１月末からそれが始まった時は、朝食を済ませてから出勤していた。しかし６月になってから、出勤時間が極端に早くなり、早朝４時前には家を出発するようになった。それに伴い僕も妻も洋介を送り出すために、洋介より１時間早く起床して、妻は弁当をつくる。洋介を送り出して４時を過ぎても僕と妻は、１時間の時間をおいて５時に朝食を始める。４時から５時までの１時間は、自由な時間となる。その時間を活用して、僕は適判の勉強をする習慣が付いた。毎朝３０分から５０分はその時間に充てることができた。昼間は現場に行って検査を行い、帰宅して検査の書類をまとめると夕食の時間になってしまい、風呂に入り、明朝２時４５分起床のために８時過ぎにはベッドに横になると言う習慣になった。昼間の検査日程で時間に余裕があると、いわき明星大学の図書館へ行って、適判学習のために時間をとる。適判の受検は、今年５回目である。１回目の受験勉強の時は、猛烈に学習をした記憶が残っている。その時の食事は１日夕食時の１回のみ。朝食と昼食は抜いてその時間を学習の時間にあてた。それを３か月継続して、５ｋｇ痩せて５７ｋｇになった。健康診断をした翌年に、担当医師から痩せすぎの指導を受けた。次の年は、東日本住宅評価センターが希望者を募集して社内セミナーを開催するが、社員でない僕は特別枠で参加させてもらって、学習することができた。しかし、そのセミナーの日程が６月から７月の２か月間を毎週水曜日開催されるため、僕にとっては厳しい生活環境となった。そのセミナーのために仕事の段取りを毎回調整しなければならない。水曜日を休暇にするために、火曜日と木曜日に仕事を振り分ける。火曜日から木曜日が厳しい日程を熟さなければならなくなる。東京へ行ってセミナーを受けると、当然疲労が蓄積する。バスや電車に乗る時間が往復約１０時間、セミナーが４時間と言うことになると、後は風呂に入り睡眠をとるだけの１日となり、適判の学習をする余裕がなくなってしまった。

リズムが掴めないまま、８週間のセミナーが終了した時は、受検日１か月前になっていた。その１か月間は、仕事をこなしながら、昼の空いた時間はいわき明星大学の図書館へ行き学習をした。そのセミナーを２年続けて通い、しかし結果として合格することができなかった。この時に学習内容について反省してみることになった。学習内容は、毎年大成出版社が発行する、過去問の書籍を購入してそれだけを頼りに知識を蓄積し、覚えていった。本試験では、過去問には出てきたことがない問題がいくつかあり、それに対応することができなかった。その時、過去問ばかりでは受験対策にはならない、新しい問題を見つけなければならないと感じるようになった。そして昨年、僕がお世話になっている評価センターと同じ業務を行っている、ＥＲＩというところにお世話になることになった。ＥＲＩは建築確認、性能評価などを行う民間検査機関であるが、ＥＲＩアカデミーという会社を立ち上げて、建築に関する資格試験の学校を持っている。僕は２０万円を投資することを決断して月１回のペースで東京に通学することになった。ＥＲＩアカデミーが開催する学習資料は、新しい問題を沢山考えて毎回配布し、試験を行い、そして解説を行った。月１のペースだったので１回の資料について学習することは、余裕があるはずなのにそれを処理することができなかった。資料だけが増えていって、全ての資料に目を通す余裕もなく、時間が過ぎて、そして受検日を迎えた。昨年のその受検が終了してから、直ぐにＥＲＩセミナーで配布した資料を整理してみた。それは来年のための適判の学習の資料の準備としての行動だった。結果として不合格となった。不合格の通知が届くと、また適判の学習が始まるのかと、頭の中が学習モードに切り替わる。今年は、どのセミナーにも参加せず、独学で学習することを貫いた。洋介が４時に出勤して１時間空いた時間ができる。その１時間を毎日、毎日学習することができる習慣が身に付いた。昨年まで学習した時間と比較すると、今年は３分の１の時間にすぎないような内容だった。しかし殆ど毎日学習することができたように思う。結果的に学習のリズムが整っていた。

今年は外部からの情報は一切ないまま受験勉強をすることになった。学習方法は、過去問のテキストが唯一の頼りにする情報源だ。一般財団法人　建築行政情報センターが発行する、建築基準適合判定資格者の手引き、平成28年度版をネットで注文して購入した。６月１６日にテキスト代金を振り込んでその２日後に到着した。早速昨年の問題から学習をしていった。２８年度テキストを購入する前から勉強は始めていた。２８年の新しい年を迎えると直ぐに、建築基準法令集を購入する。その新しい法令集を使用して、過去問を学習してみると、その時は正解だったものが、正解に当てはまらなくなるものが出てきた。法律用語も新しいものが出てきた。例えば施行令第１１２条第２項は防火区画の規定が記載されている。準耐火建築物でと始まっていたものが、特定非難時間倒壊等防止建築物という言葉が最初に出てくる。その言葉のカッコ書きに、特定非難時間が１時間以上であるものを除くと書いてあった。基準法第２７条は、見出しが変化した。「耐火建築物としなければならない特殊建築物」となり昨年の準耐火建築物が削除された。そして第２項から１項増加されて第３項までとなった。問題を学習していくと、基準法にいろいろな変更を見つけることができた。こんなに建築基準法が変更になって、過去問だけに頼り、独学でやって行って受検日を迎えることができるのだろうかとやや心配になる。昨年は、適判のテキストは購入しないで、ＥＲＩアカデミーの資料だけを頼りに学習した。２８年度版の適判テキストを購入して２７年度と２６年度を学習してみると、昨年たくさん学習したにもかかわらず、新しい発見があった。正に目から鱗と言う体験をした。

受検日程は、午前中考査Ａ、１時間２５分、午後考査Ｂ、３時間２５分の配分で１日を過ごすことになる。考査Ａは５者択一１７問出題される。５年間建築基準法に目を通してきた。それでも、同じ問題を何度解いても、できない部分が出てくる。読解能力が不足しているのが原因なのだと思う。問題１から３までは、行政側の立場として指導しなければならない内容になっている。違反建築物に対してどのように対応するか。建築確認は、建築物の種類、規模、用途によって必要か必要でないか。完了検査を受けていないもの、または検査に合格していないもので特殊建築物は使用制限が発生する。構造の問題については、保有水平耐力計算、限界耐力計算、許容応力度計算が規模に対して、どのようなルートでクリアーしなければならないか。同じような内容でも条文の数値が違えば、法律の範囲が違ってくる。そして一番の問題は、条文は、その部分の条文だけでは賄えず、様々な条文が絡んで一つの条文が成立する。だから複数の条文を理解しないと、一つの条文を把握できない。条文の言葉の構成も理解するまでに時間がかかる。このような条件を乗り越えて、問題を理解し正解を導いていくことになる。今年は、間違えやすい問題について、それに関わる条文の全文を何回も繰り返して音読した。

平成２８年度版の適判テキストの考査Ｂを勉強していると、始めて規定を確認する内容のものがあった。それは、道路高さ制限の問題だった。道路高さ制限は、考査Ｂの中では最も時間がかかる問題だ。３時間２５分の中で、１時間はかかるくらいのボリュームで出題される。建築物の高さの算定は、前面道路の路面の中心からの高さによる。後退距離の条件、前面道路が２以上ある場合の条件、敷地が異なる用途地域がある場合の条

件、そして斜線勾配、適用距離は容積率も絡めて導き出す。そして今回初めて気が付いた条文が次のような内容だ。基準法第５６条第３項、第４項にそれが記載されてある。第一種中高層住居専用、第二種中高層住居専用、第一種住居、第二種住居、準住居のそれぞれの地域に限り、前面道路の幅員が１２ｍ以上である建築物について、前面道路の反対側の境界線から建築物の後退距離に相当する距離だけ外側の線からの水平距離が前面道路の幅員に後退距離の２を乗じて得たものを加えたものに１．２５を乗じて得たもの以上の区域内においては、斜線勾配は１．５とする。このような緩和規定があり、それが２６年度と２７年度の２年に渡って第３項、第４項規定を盛り込んだ問題が出題されていた。僕は、昨年ＥＲＩアカデミーの資料を信頼して適判のテキストを購入しなかった。

その購入しなかったテキストに新しい問題が解説してあり、そして次の年、つまり昨年も連続して出題されていた。それを僕は、勉強する機会がないまま、昨年の適判受検を行ったことになる。そしてこの条文は、新しく盛り込まれたものではなく、前から存在していた条文であることを確認した。

今年もいわき明星大学の図書館で勉強をした。しかし、昨年より大学へ行く頻度は大幅に減少した。今年の学習方法として、昨年や一昨年に行っていた、ある学習方法をしなかったことがある。それは、本試験と同じ時間配分で、考査Ａ１時間２５分、考査Ｂ３時間２５分を継続することである。この長い試験時間に耐える練習をすることができなかった。考査Ａについては、１回に出来る問題は４問ほどだ。だから考査Ａの１７問を完了するまで３日から４日かかる。考査Ｂについても同様だ。計画１は、木造住宅、第一種低層住居専用地域で５問を１日掛ける。計画２は、鉄筋コンクリート造、複合施設で２日掛ける。計画３は構造の考え方の問題であるが、これは１日で終わる。計画３の構造はここ２年ほど問題が簡単になった。１年度分の問題が完了するのに１週間かかる。そのペースで今年は学習を進めてきた。ボリュームとしても、過去５年分は行っておらず、２５から２７年度分を何回か行っただけだ。昨年や一昨年と比較すると学習時間や、分量は相当に減少していた。このような準備体制で果して、受検を乗り越えられるだろうか。受検日前までに、受検日と同じ日程でどうしても練習をしてみたかった。受検２日前、大学の図書館で実行してみるが、１時間経過した時点で頭痛を感じることになり、途中断念して帰宅した。受検前日は、自宅で同じことを試みた。たまたま、仕事が無かった日だったので、１日を学習時間に使うことができた。しかし、やはり同じように１時間経過した時に、かなりの頭痛を感じて中断し、そして継続を断念した。前日目標にしていた２７年度の１年分をやりきれないままその日の学習は終了した。そして当日の朝を迎えることになる。いわき、仙台間をバスで行くことになるのだが、２時間４０分の所要時間があった。その時間を、軽く睡眠を取り、ノルウェイの森の日本語版と英語版を約１時間読んだ。その後、２７年度の適判テキストを拡げて、考査Ａと考査Ｂの問題と解説を音読した。音読してみて感じたことは、今まで学習してきているから理解できていると思ったことだ。

２７年度の適判テキストの全ての問題と解説を読み終えた。バスは、高速道路の仙台宮城を下車して繁華街へと向かっていった。道路は渋滞して、一定の速度で走行することが困難になっていた。それでもバスは、確実に前に進んでいった。試験開始時間が１０時、バスが広瀬通りの停留場へ到着する予定が８時３９分、目的地まで徒歩１０分を考えると１時間２０分の余裕がある。渋滞して滑らかなスピードで走ることができないバスに、やや苛立ちを感じたが、時間に余裕があることを自分に納得させ、運転手に委ねるほかはないと、言い聞かせる。そして約１０分遅れで目的の停留場へ到着した 。このバスは仙台駅が終点であるが、広瀬通りで下車する客が４，５人いた。僕はここを下車すると、付近のコンビニエンスストアを探した。１分も歩かないところにコンビニを見つけ、僕はトイレを拝借して小便を済ませて、何も買わずに店舗を後にした。今年の試験会場は、昨年までとは違う場所に設定されていた。事前にそこの住所をアイフォンのメモに書き込み、更にパソコンからグーグルマップで検索して地図を印刷して持参した。試験会場は、勾当台公園の付近にあることを確認しておいた。勾当台公園は、何度も行った経験があるため、地図を頼りにしないで進んでいくことができた。その会場に行かなければならないという思いだけが僕の足を動かせていた。会場の名称は、仙台合同庁舎Ａ棟８階講堂となっている。現地にはＡ棟、Ｂ棟が方向違いに林立していた。午前９時前であったが、強い日差しが体中に照りつけ、眩しくそして気温もかなり上昇していた。入り口を入ると、「建築基準適合判定資格者検定会場」のポップが掲げられ、守衛が立ち、係員が机に２人で受付をしていた。僕は、受け付ける前にバッグから受験票を取り出し、それを係員に提示した。受付を済ませると、守衛が構えているゲートを抜けてエレベーターホールへ進んだ。エレベーターは４基並んでいたが、８階まで行けるそれは、左の２基だけで、その前に僕は並んで待った。エレベーターが１階に到着した時は、試験会場へ行く人は４，５人程度で、余裕で８階へ着くことができた。会場は受検生全員（東北６県の受検者）が収容できる広さになっていた。座席表を見ながら僕の席を確認してそこへ行って着席した。

前回まで行っていた試験会場と違い、無事に到着できることだけを考えながら、新しい会場を目ざし黙々と目的地まで歩き続けた。到着すると、忘れ物に気が付いた。仙台に到着してバス停から会場に向かう途中、コンビニに寄り昼食の準備を整えるつもりでいた。その買い物をしないまま会場に来てしまった。試験会場に着席すると、係員が建築基準法令集のチェックをしている。受験生が到着した順にその席に行き、法令集を受験生から受け取り、内部に違反した書き込みがあるかどうかを確認する。僕は、昼食の買い物をしたいと思って外出したかったが、係員の確認作業を待つことにした。僕の法令集には、受験対策が施されていた。法令集の表紙を一枚開くと黄色い何も書かれていないページが現れる。その余白を使用して、７０行３列に罫線を書き、問題に対するキーワードとページの数字を書き込んでいる。過去４回受検してそのことについて１度だけ係員から「審議します」と言って、技官へ相談に行き「大丈夫でした」と言われたことがある。昨年は、そのことについて問題はなかった。今年は、どんな反応がくるか心配しながらその確認作業を伺っていた。僕の法令集は、黄色の井上書院の建築基準法令集である。表紙の裏に２００個ほどの見出しを書いたがそれ以外は、書き込みはほとんどない。赤鉛筆による下線引きがほとんどである。係員は、僕の法令集の確認を丁寧に実行してはいなかった。１枚１枚捲（めく）るのではなく、左手で背表紙を掴み右手の親指で本の小口を押さえペラペラと連続して中身を確認する程度だった。そして「大丈夫です」と言って机の上に貼ってある受験番号の紙に鉛筆でチェックをして、法令集の確認作業が終了した。これさえ通れば、僕の試験中の回答を出すイメージが整ったことになる。そして、席を離れ昼食の準備をするためにエレベーターで１階へ降りた。守衛の人に「近くにコンビニありますか」と尋ねると、「このビルの地下にも売店があります」と教えてくれた。僕は、買い物に時間をかけたくないし、近い方がいいと思い、守衛の言葉通り地下の売店へ向かった。

階段で地下へ下りると、階段のすぐそばに売店があった。コンビニのヤマザキショップの経営する売店だった。弁当やパンのコーナーを探し、その場所を見つけるが品数が少ない。品数が少ないながらも、試験の最中に取る昼食を満腹させるほどの

ものは必要ないと思い、軽くできる食べ物を探した。そして選んだものがミックスサンドとブラック缶コーヒーだった。レジで代金の支払いを済ませて、また直ぐに８階の試験会場へとエレベーターに乗った。お昼になってから売店へ行っても、昼食としての品物はなくなっていただろう、朝のうちに売店で準備をしていて正解だったと思う。会場の自分の受験番号の席へ着いて、試験開始まで時間に余裕があった。開始までの時間を２７年度テキストの考査Ａの問題を読んで確認する作業をした。昨年の考査Ａの試験の時は、１から１７問を尻の１７問から解いていった。この作戦は、簡単なものから処理しようと考えたからだった。結果的に不合格となったが、やり方としては、１問目からにしろ１７問目からにしろ、時間的には１時間２５分を必要とした。さて今回はどちらからやればよいかを考えた。どうしようと悩んで、１問目からやって行こうと決断した。その決断と同じタイミングで、試験開始２０分前、試験に対する説明が行われた。そして試験に必要な問題用紙と解答用紙が配布され、配布されると直ぐに受検地と受験番号と名前をどちらにも記入した。午前１０時に試験が開始されるが１０分の待ち時間を過ごすことになった。その間何もできないまま、試験開始の合図を待ち、そしていよいよ試験が開始された。

試験開始直前に決定した通り、問題の１から順に回答を出していく。法令集の表紙裏に独自に作成した、インデックスを見ながら回答が進んでいく。インデックスのページを左の薬指で押さえ、問いに対するキーワードを見つけて、その項目を探しページを確認して条文を開く。問題文と同じ条文であるか、部分的にアレンジしていないかを確認する。何問か進んでいくうちに、法令集にアンダーラインが付いていない条文が問題として出題されていた。それを見つけることができ、問題文と条文が一致しているかを確認して、間違っているかいないかを判断して回答を出した。昨年までは、これができなかった。学習したところ以外の条文を見つけられず、時間ばかり過ぎていき悔しい思いを経験した。それが今年は、それが早い時間で条文を見つけられている。昨年より進歩しているなと思って、僕はそれが嬉しかった。当日前夜まで、考査Ａを１から１７まで一気に回答を出すという学習をしていなかったという不安があった。そんな不安を感じさせない集中力でどんどん回答を出す作業を続けた。１７問目の回答を出す時間帯は、１時間２５分の所用時間のほんの残りわずかであった。そして最後に自分が出した回答が、答案用紙に正確に書かれているかを確認した。間違いないことを確認して、受験番号と名前の記入も確認して、それが終わると同じタイミングで終了の合図があった。終わった瞬間、今年は行けそうな予感がした。考査Ａが終わると、椅子から立ち上り、お尻の血流をよくしようとして窓際へ移動した。外を見ると天気が良く晴れた空が目の前にあった。そして席に戻り、朝地下の売店で買っておいた昼食を取る。サンドイッチは、野菜、卵、ハムの３つが入っていた。水を飲みながら、そのサンドイッチを食べ終わり昼食を終了した。持参した座布団を机の上に乗せ、頬をそれに付けて目を瞑り休憩をした。眠りに落ちることなく約１０分間、目と脳を休めた程度だった。小便を済ませて席に戻り、午後の部が開始される１２時３５分までの間を、平成２７年度の考査Ｂの問題と解説に目を通して過ごす。開始２０分前に、係官が試験の注意事項を読み上げ、他の係員は答案用紙と問題用紙を配布し始めた。問題用紙は、問題文と図面２枚が配布され、計４種類が配布された。全ての配布物に受検地、受験番号、名前を記入して開始までの１０分以上の時間を何もすることなく待つことになった。そして「始めて下さい」という合図とともに、問題文を読み始めた。計画１は木造で第１種低層住居専用地域に建つ店舗併用住宅が出題された。建ぺい率、高さの限度、軸組計算、用途地域、換気量が出題され、黙々と書き続けた。今回の建ぺい率は、ここ１０年間の過去問で条件にされていたものが含まれていなかった。それは、前面道路の条件が法第４２条第２項道路に該当していないことだった。幅員４ｍが確保されていたため、２項道路の説明をやらないで回答を出すことができた為、短時間で終了した。計画１を終えると、続けて計画２へ進む。今年は、鉄骨造という、これも過去１０年間出題されていない構造が出た。鉄骨造という構造が今後の問題にどのように影響するかを、問題文を読みながら確認してみた。耐火構造の耐火建築物という条件が付いていたので、いままで通りの感覚で進めていけばいいと思った。建ぺい率、容積率、道路高さ制限といつもと同じように、問題の項目は同じである。敷地が２つの用途地域にまたがり、どちらも準防火地域の設定だ。道路は敷地に３面接し、南面は１２ｍ幅員、西と北面は６ｍという設定になっている。特段難しい条文の引用はなさそうだ。

難題なものはなく、淡々と順序に従って考査Ｂの問題を解いていく。いつものように道路高さ制限の説明に時間がとられる。法第５６条第１３項と１４項を（に）欄に記入したが、説明文を書いている途中この条文は必要ないと判断し、脇に×と印をつけた。（ろ）欄は○×の判定、（は）欄は判定のための説明文、（に）欄は根拠となる条文を記載することになっている。残り１時間を切り、後４５分という時点で、計画Ｂの２つについてたどり着いていない。その２つを残したまま、計画３の構造へと回答を求めていった。構造は５問が出題され、３問までは、簡単に回答を出すことができた。しかし４問目がまるで分からない。「告示１７９１号について判定せよ」と書いてあった。その告示が法令集を開くことができない。次の５問目は、「壁量について」とだけ記載されていた。今までの過去問の傾向を考えると、前問の回答を出して、その回答に基づいて、次の回答が得られる。だから４問目の回答がないまま５問目の回答はありえないと思い、この時点で残る構造の２問を諦めた。そしてまた、計画２の残しておいた２問について回答を始めた。やってみると難しい問題ではなかった。初めから計画２を最後まで一気にやるべきだと後悔した。２問残して計画３へ進み、そして計画２に戻った時、計画３から計画２へ問題のイメージを切り替えなければならない。それに要した時間は、短時間ではあるがロスタイムであったと思う。考査Ｂは、問題文と図面は持ち帰ってもいいが、解答用紙は、常識ではあるが提出する。その解答用紙に出題の項目が記載されているだけで、問題用紙には記載されていない。例えば、「建ぺい率」「容積率」「道路高さ制限」という形だ。だからこの項目はメモを取らないと問題文を持ち帰ってもどんな問題が出題されたのかが分からなくなる。計画１は、項目と判定をメモができた。計画２は、最後の２問以外は項目と判定をメモできた。計画３は、項目も判定もメモが取れなかった。見直しの時間がないまま終了の声が聞こえて、その声と同時にペンを置き、解答用紙をまとめ係員が回収するのを待った。午後の考査Ｂについては計画１、計画２は難しいものはなかったと思った。計画３については、２問を白紙で提出したが他の３問は容易にできたと思った。１００点取る必要はない。毎年の合格発表に基準点数が公表されるが、６８点が通年の合格点数だ。考査Ａ，考査Ｂを合算して今年は行けるんじゃないかと判断し、気分よく受検を終了した。時計の針は午後４時を回っていた。帰宅のための高速バスの時間は、５時半である。１時間以上の余裕がある。試験会場を後にして、勾当台公園のわき道を通り、大きな交差点で信号待ちをした。目の前に三越デパートを見つけた。先日、バスツアーで来たばかりの所だ。信号が青に変わり、そのまま三越デパートへ入った。所謂「デパ地下」へ行って、お土産を見て回った。１周りして、そして２周り目に品物を決めてお土産を購入した。お土産を買い終わったのは、試験終了から３０分経過した、４時半だった。直径７ｃｍ厚み２ｃｍほどの大きさで餡子は５

種類あり、僕は５個セットのものを選んだので、店員は、全種類の餡で詰め合わせてくれた。家族で夕食後にデザートとして食べる分でいいのでそんなに多くの量は必要としない。買い物を済ませて、仙台名物アーケードを歩きながら、夕食の店を探した。直ぐに目についたのが「天丼てんや」だった。この店は、東京へ適判の講習会へ行くと、帰りに東京駅の地下街にそれがあり、よく食べていた店だった。迷わず「天丼てんや」ののれんを潜り正面が壁になっているカウンター席に座った。店員がお茶を運んでくるまでの間、注文するものを決めた。野菜てんぷらが何種類かどんぶりご飯に乗っかり、サイドに盛り蕎麦が付いているメニューだ。夕方５時前で店内は、混雑はしていなかった。僕が座っているカウンター席には、７脚ほどの固定椅子があったが一人も座っていなかった。食事が終わりお茶を飲んで一息ついてリュックサックを背負いカバンを肩にかけ、レジに進んで７２０円を支払い、その店を後にした。後は、予約したバスの時間を待つだけとなった。バス停まで到着すると３０分以上余裕があった。せっかく仙台へ来たのだからと思い、やはりいつも仕事を頂いている評価センターへ顔を出すべきだと考え行動した。その事務所はバス停からわずかの所にあった。明治生命ビルの２階に階段で上り、従業員通用口のドアをノックして、ドアを開け「こんにちは」と声を掛けながら社内へ入った。支店長の板倉さんと直ぐに目線が合い、僕はまっすぐ支店長の処へ移動した。支店長は快く僕を迎えてくれて、客用の丸椅子に腰を下ろした。「そういえば今日は適判の試験の日ですね。内の従業員２人も受検しているはずです。会場で会いませんでしたか？」「会場を見渡すほどの余裕もなく終えてきました」。今年でこの試験は５回目ですというと、オリンピック的サイクルですねと支店長が言った。オリンピックは４年に１度だからそれ以上ですねと訳の分からない会話になった。もし千葉さんが合格したら記録を更新しますよ。今までの最高齢者合格がうちの支店の小野さんが５８歳で取っています。僕はこの日の時点で６１歳、合格が発表になる１２月には６２歳になっている。昨年ＥＲＩアカデミーの模擬試験で昼休みに、アカデミーの社長と話をする機会があった。「千葉さんのように役所勤務でもなく、民間検査機関に所属しているのでもなく、個人として受検してしるのは珍しいです。もし取得できれば、ＥＲＩアカデミーとしてそのようなケースでは初めての合格者になると思います」という話を思い出し、それを支店長に話をした。帰宅バスの時間が迫り、支店長への挨拶を兼ねた受験報告を終え、評価部長の髙野さんに挨拶だけするために、支店長の席を後にして移動した。後ろ向きに座っている方向から「千葉です」と声を掛けると、部長は振り向いて「あぁ、千葉さんごくろうさま」と挨拶してくれた。「適判の勉強をしているなんて、大したもんですね」と言われて、「今年で５回目になります」と恥じらいもなく、にっこりとして言った。「今年は受かりますね」と言われて、さっきまでやっていた受検の手ごたえを感じていたので、「今年もだめですね」とは言わなかった。毎年、一生懸命受験勉強をして臨んでいるので、いつも合格しているだろうと予想しながら発表を待ちそして不合格の知らせが届く。４回受検していまだに取得できない。なかなか取得が困難な資格だと毎年思う。髙野さんの脇には星さんが、僕を興味ありげに僕と髙野部長との会話に参加したい様子が伺えた。奥には石川さんが、にこにこしながら僕らの様子を見守っていた。たくさん従業員がいる事務所の皆に挨拶をしたかったが、制限時間いっぱいでそれを断念した。帰宅バスの時間が迫っていたので、あまり話もできずに評価センターを後にバス停へ向かった。

広瀬通りバス停に到着して５時３０分の高速バスを待つ。それでもまだ１０分ほどの余裕があった。バス停の前は、おしゃれなブティックが並ぶテナントビルになっていた。そのビルの風除室を抜けて廊下を歩きウィンドゥショッピングをした。僕には興味がもてそうにもない店舗ばかりで、１つの店舗にも足を踏み入れることはなかった。８月下旬の季節は、まだまだ暑い日が続いている。このビルを出てバス停の前で待っていたが、立っているだけで汗が滲（にじ）んでくる。風除室の中でバスを待つことにして、そこに入ったがバスを待っている人たちは、みんな外で待っている。僕一人だけ涼しい風除室でバスを待っているのが後ろめたかった。そして直ぐに風除室を出るが、暑さで直ぐに汗ばみ、それでもそのままバスが来るのを待った。事前に帰りのバスの予約をしておいて座席も決まっていた。僕は９Ｄという後ろの右の窓側を希望したが、既にその席は予約済ですと言われ、１番前の右の座席を指定した。第二希望の座席に腰を下ろして高速バスはいわきへ向かった。５度目の適判試験が終了した。もうしばらくは、受験勉強からは解放される。目を瞑り暫くの間眠りについて体と脳を休めた。睡眠を３０分ほど取り、いわき好間へ到着するまで、これからの２時間は持参した小説を読みながら時を過ごした。いわき好間に到着して、駐車場に止めておいたプリウスに乗り換え帰宅した。次の日は性能評価の検査が何件も予定している。

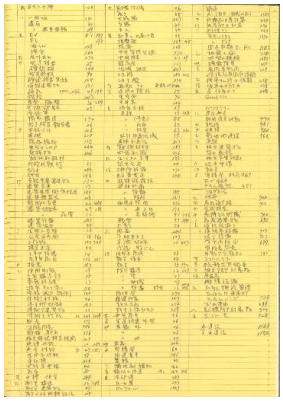
片付けをして風呂に入って明日の仕事のイメージを整えてベッドに横になったのは１１時を回っていた。適判の出来具合の反省は暫くたってから行った。適判の試験日から１０日が過ぎて、試験で使用した資料を整理し、回答をメモしたままの資料をコピーした。

考査Ａは５者択一式１７問。学習をしていた時は、１問５枝について全てを読んで回答を導き理解していく。本試験では、間違っているか、正しいかが問われ、その回答が得られた時点で次の問いへ進んでいった。そうしないと時間内に終了するのが困難になる。枝問題ごとに番号の上に○×の印をつけた鉛筆の跡が残っている。試験当時判定したものを参考にせず、新鮮な問題として回答を出していく作業をすることを考えている。そのために、試験当日のメモを全て消す作業をした。試験に使用されている紙の質はコピー用紙よりやわらかいので、消しゴムで鉛筆のメモを消すためには、破れてしまうことを恐れて慎重にやらなければならない。ゆっくりゆっくり慎重に鉛筆書きのメモを消す作業をした。５×１７＝８５。８５問の○×を消していく。消しても、消してもまだまだ消す作業が続く。１時間２５分という試験時間でこんなに読んで判断していったことに当時の集中した時間が大変な作業だったことが思い起こされた。メモが消された問題用紙が整った。そして新鮮なものとして１問から回答を出していった。９月６日１３：０９から１４：１９まで１時間１０分で１から５問までの回答をだした。１枝問ごとに関連条文をノートに書いていく。正しいか間違っているか判断できないところが２５枝問中２つあった。その日の夕方２問追加して２６分かけて自分なりの回答を出す。この日は７問を終了したことになる。問題を読みながら法令集を引いていく作業が楽しく感じる。問われていることに対してどんな条文が該当するかが判断できるからやっていて楽しさが出てくる。７日は８、９の２問のみの回答をだす。２問で２４分かかる。９日は１０から１４までの５問を１時間２２分かけて回答を出した。日が飛んで１３日、１５から１７までの３問を１時間２分かけて回答を出した。６日から１３日まで８日間、実際は４日間。６日１時間３６分。７日２４分、９日１時間２２分、１３日１時間２分。合計するとちょうど４時間かって自分なりの回答を出すことができた。毎日を法令集を引きながら生活していけたら、建築基準法に対する知識が豊かになるだろうと自分の未来を想像した。

平成２８年８月２６日、建築基準適合判定資格者（以下：適判）の受検が終わり、いつものように日曜日を除く毎日、住宅性能評価検査をするため車で移動していた。そして平成２８年

１２月１５日、適判の合格発表の日がやってきた。この日も車で検査のために移動していた。勿来町関田付近を移動しているときだった。車のフロントには携帯電話を専用のスタンドに立てていつでも最新情報が表示されるようになっている。そのアイフォンの画面にラインでメッセージが届いた。「千葉さん、もしかして合格？！おめでとうございます！やりましたね」という文言だった。私は正午過ぎてからの発表だと思っていたが、午前９時４６分の通信だった。このラインが届いて場所のいいところを見つけて駐車した。アイフォンのサファリを立ち上げて国交省のサイトへ繋ぎ、適判の合格発表のサイトを開いた。確かに自分の名前が掲載されていた。福島県では５名が合格していた。この時やっと肩の荷が下りる感じがした。そして適判の勉強はしない生活ができると思った。５年間一生懸命学習をして、漸（ようや）く合格することができた。毎年福島県の合格者が５名程度の厳しい国家試験だ。この試験は、県や市町村の建築指導課の審査員が使う資格である。旧名を「建築主事」資格という。私は、民間検査機関の仕事をするようになって１０年を超えている。しかし私の仕事は「性能評価員」で確認検査はできない。住宅性能評価の仕事に関わるようになって２年が経過すると受験資格が得られた。そして検査機関からも適判資格を取得するように勧められる。最初に適判のテキストを拝見したときに、一生掛かっても取得は無理な資格だと思い、受検する気持ちは全くなかった。縁があって受験勉強を始めたが、５年間は毎日頭の中に「暇があれば学習しなければならない」という縛られた生活が続いた。毎日が学習という苦しい生活をしながらも、知識が蓄積していくことも感じられて充実していた。諦めなかったことが大きな獲得であり自信にも繋がった。学習とは継続する事であるということをこのとき実感した。取得してからは、建築基準法の法令集は学習していない。前のようにアホになった。人間なんてこんなもんかも。

１０回生千葉良司



富　士　山　登　山　紀　行　　2018.8.17

朝５時、９時間の睡眠から目覚めて階段を下りる足（膝）に疲労は感じられなかった。９時半から毎日の日課としている体操を始めた。ラジオ体操をしても普段通りに行えた。鉄アレーは足の屈伸をするときに筋肉に少しだけ硬さを感じ、屈伸に重みがあった。腹筋、背筋、腕立て伏せも普段通りできる。体に変化を感じたと思ったことがあった。毎日前屈を１分間行うのだが、頭が膝に着いてしまった。こんなことはいままで毎日やってきたが一度もなかった。昨日の行動で柔軟さが現れたとしか考えられない。毎日行っている開脚も爽快に前屈みになれる。実は、昨日の行動で私は２，３日寝込んでしまうのではないかと心配していた。まもなく６３歳になろうとしている私は、一昨日から富士山登頂をして昨日無事帰宅した。一昨日夜、富士スバルライン五合目を８時４５分に出発して、山頂を目標に歩き始めた。経験者である長男の大祐が案内役になった。富士山に何の知識もない私と次男の洋介が大祐の指示に従う形となる。案内とはいえ、迷うことが不可能なくらい登山者で犇（ひし）めいていた。五合目休憩所を出発するとしばらく平坦な道を歩く。周りに街灯はなく持参した懐中電灯が安全を確保する担保となる。平坦な道から簡易な階段状の道に変化し、それがしばらく続く。登り始めて一つ目の小屋に到着したのが６合目。標高２，３９０ｍ。ここは安全指導センターと言うらしい。何人かの指導員たちが私たちを迎えていた。私たちの前を歩いている人たちに何かパンフレットを配布していた。私たちも配布する指導員の前で、素直にそれを受け取った。その時指導員がこれから先の道のりの状況を教えてくれた。「五合目からここ六合目までの標高差は８０ｍです。ここから七合目までの標高差は一気に３１０ｍの差があります。無理をしないで安全に行動をしてください」。この言葉に驚いてしまった。六合目までで可なりの疲労感があった。３１０ｍの標高差とはどういうものか見当がつかないが８０ｍに対して３１０ｍと考えると辛さの度合いは相当なものだろう。無知な私にとってはとても貴重な情報であった。私は指導員にお礼を言った。六合目を歩き始めると遥か高いところに電灯の明かりがジグザグな帯をなしているのが見えた。あの明かりと同じところを私も行くのかなと漠然と考えていると、直ぐに山道の勾配の険しさを体験することになる。初めは、大祐と洋介が私より前を歩いていたが、私は常に遅れ気味。それに気づいた大祐が私より後方にポジションを決めての登山となった。標高が増すに従い、疲労を感じ息つきも厳しくなっていく。何度も休憩を取りながら、登り続ける。途中で休憩している登山者が何組も見かける。１時間以上かかったかどうかわからないが七合目の小屋に到着した。小屋の名称は「花小屋」。私のこの時の体調はあまりいいものではなかった。腸に空気が溜まり、腹が張っている状況だった。便を催すが便座に腰かけても出ない。出るのは溜まったガスだけ。そして常に胃が「ぐじゅぐじゅ」と鳴っている。山小屋の便所は、「使用料２００円」と札で表示されてアルミ製の箱がその料金箱となっていた。使用した結果、胃腸からのガスが抜けただけだった。前よりは幾分快適さを取り戻して登山を開始する。６合目で指導員から頂いた「吉田ルート」の案内図を途中で確認しながらの登山となる。７合目から８合目までの標高差は、４００ｍ。その一区間に８個の山小屋がある。山小屋ごとに休憩をとる。山小屋の外には、休憩している登山者が既に場所を占有して休憩する場所がなかなか見つけられない。小屋側と崖の手摺側に登山者は休憩を取り、それを挟んで登山への通路となる。やっと休憩する場所を確保してザックを肩から外し腰を下ろす。体育座りをして膝に両手を添えて頭を付けると直ぐに眠りについてしまう。こくっとして体のバランスを崩し目が覚めるが、眠っても２、３分の長さだ。眠ってしまうことを恐れ、直ぐに登山を開始する。登っても、登っても急こう配の岩肌の登山道が続く。私はこの時富士登山の試みを後悔していた。周りは暗く景色らしいものはない。ただ登頂を目的に足を前に運んでいるだけの事だった。

足腰の力のないことを実感する。ステッキがあればもう少し楽に登れるだろうと想像した。兄達からのアドバイスの中でステッキのことも言っていた。私は登る時は両手が自由な方がいいという判断でステッキ持参を否定した。足だけの力だけでは辛さがあった。６合目から７合目を登る山道には、階段があったり、崖崩れ防止の石垣が積まれたりしていた。私はその積まれた石垣の隙間を探しながら指をそこに食い込ませ、登り進むための力の一部とした。足腰だけで登るよりは少しだけ楽に登れる方法だった。山道はジグザクな形状で整備されていた。ジグザクの角を曲がると、そこには必ず１組以上の休憩している登山者がいた。我々も角に来る毎に休憩をする。ある角で休憩したとき、洋介が「登るのが楽しい」と言った。私はその言葉に驚いた。私はこの辛い登山でまだ見えない頂上へ無事到着できるだろうかと弱気になっていた。そんな思いをしている時の洋介の言葉

には、本当に想定外で愕然とし、そして２５歳とその父の年齢の差を実感した。楽しいという考え方と思ったが、洋介にとっては、考え方ではなく富士登山を本心から楽しんでいたのだ。そして長男の大祐は、何の言葉もなく私に合わせた登山を心がけているようだった。７合目を過ぎると山小屋が短い間隔で待ち受けてくれた。一つの山小屋を目標に進んでは休憩するというリズムで頂上を目指した。

洋介の友人が富士山の山小屋で働いているらしい。大学時代に知り合った友人だという。どうして分かったの？と聞くと、フェイスブックの情報だという。登山中、洋介はその友人に連絡がとれない状態だ。アイフォンの電池が６％を示し、画面を開くことができない。山小屋の名前は「本八合目トモエ館」。吉田ルートの頂上から数えて２つ目にその小屋はある。休みながら息を切らしそれでも前へ進み、腸には空気が溜まり苦しい。それでも漸（ようや）く、そのトモエ館に到着した。洋介の携帯が使えない状態であったが、気がついてみると洋介の友人だという人が現れた。私は当然男であると思っていた。その友人は期待を外し女性だった。私は眠さと疲労で漸くそこにたどり着いて、休憩をし、目を瞑っているときの出来事で、私が気づいたときその友人は洋介と親しく話をしていた。大祐も洋介の友人は男だと思ったと言った。彼女は休憩中で仮眠をとっていた時のようだった。それでも洋介の声かけに嬉しそうに対応していた。私はいくつか彼女に話しかけた。洋介と同級生なの？この小屋への通勤は毎日登山？年齢は洋介より３歳年下。学科は洋介とは違うようだ。年齢も学科も異なる、しかも異性の友人が作れる洋介に考えを新たにした。シーズン中小屋へは泊まり込みのようだ。私は５１日泊まり込みと聞いたが、後で洋介との話の中で８１日泊まり続けると言っていたようだ。

富士山吉田ルートの登山期間は７月１日から９月１０日となっているので７２日間と言うことになる。５１日でも８１日のどちらでもいいのだが、長期滞在で、しかも環境が悪い。標高約３千メートルに建設された山小屋に仕事をしながら泊まりっぱなしと言うことになる。トイレにウオッシュレットなどないだろうし、風呂はどうするのだろう。衣類の汚れたものは洗濯して干すことができるのだろうか。日常的に普通に生活している私にとって標高の高いところに２ヶ月も泊まり生活をすると言うことにいろいろな心配や疑問がわいてくる。彼女は洋介に「今、この小屋に何人宿泊していると思う？」と質問されて、「４，５０人？」と答えると「２７０人」という回答が帰ってきた。こんな小さな小屋にどうして２７０人もの登山者が宿泊できるのだろうかと、また疑問が増えてしまった。彼女は私たちに暖かい紅茶を差し入れてくれた。彼女の山小屋のシーズンが終わり下山したら、洋介に会いたいと言っていた。そしてまた頂上を目指して登山を始める。吉田ルートの最後の山小屋である御来光館に到着した。この時私も大祐も洋介も疲労が溜まっていたようだ。大祐はこの小屋で休憩を考えていたようだ。大祐が休憩の料金をその小屋の係員に聞いた。食べるだけの休憩であれば、メニューの料金だけで休憩ができることが分かった。そこで食べて休憩することになった。

日が開けて２日目に入った。徹夜で、山頂を目指し下山する計画をしていた。山小屋で休憩して注文したお汁粉を軽くロに入れると眠りかける。睡魔と戦いながら腰を上げその最後の小屋を出る。頂上までもう休憩場所はない。小屋を出て少しだけ歩いたとき前が詰まって前へ進めないことに気がついた。山頂まで登山者で山道が渋滞していた。山岳警備隊のような人が中腹に駐在して大きな声を出して登山者に指示していた。「休まずに山頂を目指してください。止まると後者に続く登山者も止まってしまいます。山頂まで後３０分です。頑張って前に進んでください」。このようなかけ声をあげて登山者を激励していた。私は疲れ切っていたのでなかなか進まないペースに満足していた。後３０分で山頂に到着するというかけ声を信じて疲労困憊の足を前へ前へと進めていった。富士山頂上の石碑を確認できたその時は、夜が明けて明るくなっていた。山頂へ到着してみて登山者の多さに愕然とした。東京の表参道のあの人混みの状況と変わりが無いほど人だらけだった。腰を下ろして休むような場所さえ見当たらない。山頂へ着いたら火口縁を１周することも進められていたが、私の身体にそれほど余裕がない。早く下山して楽になりたいという一心だった。山頂に到着した証として大祐が自撮り棒を使い３人の到達をスマフォに納めた。頂上に到着したならば、一番の目的は御来光を拝むことだった。しかし空全体が雲に覆われ太陽の光は期待できそうもなかった。休憩もできないほどの混雑した頂上には、山小屋が3軒、軒をそろえて営業していた。その小屋に入るなどという余裕もなく、直ぐに下山を実行する。吉田ルートの下山道は、登りとは別のルートになっている。登りは勾配の険しい岩道が多かった。登った時の道を下山したら相当危険な目に遭うだろうと想像した。大祐が下山の道案内をしてくれる。人が大勢いるから迷わないだろうと思うだろうが、頂上はいろいろな方面から登ってくる。吉田ルートの他に、馬返コース、お中道・奥庭散策コース、御殿場ルート、富士宮ルートがある。最初におりる道を間違えると、私たちが来た駐車場には戻れなくなる。大祐がいなかったならば確実に迷子になっていただろう。この時点でガスが濃くなってきた。ゴアテックの雨具を羽織ることにした。そしていよいよ下山が始まる。下山道の状況は細かい石が敷き詰められている。ざっくざっくと靴をめり込ませながら足を進めていく。当然だが膝に掛かる負担は下りの方が遙かに大きい。登ったばかりで疲労が蓄積しているのに、下りもいつまで続くか分からないほど長い道のりが待ち受けている。

雲が下界を覆い見えるものは雲のみだ。富士山よりも高い位置にも雲が覆い太陽は全く姿を現さない。富士山頂上から眺める醍醐味を期待しての登山が裏切られた。土産話ができないままの下山を覚悟する。ガスがますます濃くなってくる。流れてくるのがはっきり分かるように霧が私たちに近づいてくる。歩くことが精一杯で足をなんとか移動させている。そんな中、息子たち２人は、流れてくる霧の瞬間を一眼レフに納めようとして一端止まった。体力に余裕がある若い２人に感心する。私は、アイフォンさえ出すのが億劫で写真を撮る余裕など少しも無い。黙々と下り坂を歩く。下山道はジグザクの道を切り開いたようだ。一つの直線がどのくらいの距離か分からない。ジグザクの下山道を繰り返して歩いて行く。ターンするごとに一息つく。しかし足を前に進めなければ帰宅することができない。早く５合目まで到着したいという一心で歩き続ける。下山途中で２人の息子を見失った。いくら見渡しても息子たちの姿がない。大変なことになったと思った。見失ったまま下山したとして５合目でうまく２人に会えるだろうかと心配をする。２人を探すのをあきらめて歩き始めると、２人が私のところによってきた。そして２人を見てほっと胸を撫で下ろす。息子たちは私の姿をしっかり確認していたという。

膝がガクガクしてくる。最後の５合目まで足は維持で来るのだろうか。ギブアップするわけにも行かない。ジグザクの砂利敷きの道の折り返し点で何度も休憩を入れる。休憩しているのは私ばかりではない。何組も休憩している人たちがいる。そしてまた腰を上げて歩き始める。後ろの方から走ってくる人の足音が聞こえる。そしてその足音は私たちの横を通過する。その人の足下を見ると登山靴は履いていなかった。履いていたのは地下足袋だった。そしてとても軽やかにリズムよく疲れている様子などまるで無く走り去っていった。まねしてみようと思って、二歩三歩走ってできないことを悟った。そうするとまた後ろに走っている足音が聞こえた。そして私たちの横を通り過ぎた。その足音は小学生ほどの年頃だ。しかし私たちの横を通過して１０ｍ

ほど行ったところでその少年は、つんのめって砂利敷きに強く顔面を打ってしまった。転んで何ときもしないうちにその少年の父と見られる人が大丈夫かと言うような仕草をして心配そうにしていた。私は一瞬気の毒に思いながらも吹き出しそうになってしまった。ところでこのジグザクの下山道は何回ターンすれば終点なのだろうか。折り返し点に番号札が立ててある。その数字を読んで、アイフォンを取り出し現在地をグーグル地図で確認した。

ジグザクに折り返す道を数えてみた。立て札の折り返しの数字と私が数えた数値を確認してみる。札の数字が５３番目、あと１３個折り返せばジグザクの下山道が終わって５合目休憩所までの直線道となる。もちろん正確な数字では無いと思っている。しかし自分に弾みを付けるため、これだけ頑張れば楽になれる。その思いだけを目指して歩き続ける。歩きながら考えたが、富士山に雪が積もり山肌にジグザクになっているところの景色が見える。あの景色がこの時下っている山道であることを確信した。相変わらずガスが腹に溜まり腹が張っている。トイレで便をするが出るのはガスだけだ。やっとジグザクの道が終わるが、そこからが又長い距離だった。平坦な道を歩くようになったが、登る時にこんなに長い距離を歩いただろうかと思うほどなかなか５合目へ到着しない。これから頂上を目指そうとする登山者とすれ違う。男の白人系外人の男子二人を横目にすれ違う。彼らはこれから登ろうとしているのだろうが、服装に驚いた。スニーカーシューズを履き、半ズボンを履いている。そのときの天気は雨が降っていたが、透明のレインコートを羽織っている。そんな軽装な格好でこれから頂上を目指そうというのだ。私は無謀だと思った。後から息子たちと話をしたときに、やはりその外人たちに同じ思いを持っていたようだ。

雨降る中、黙々と富士スバルライン五合目を目指し歩き続ける。そして漸（ようや）く、五合目の売店に到着した。しかし休むことなくシャトルバスの停留所へと向かう。停留所の場所が分からず、大祐が聞きながらそれを目指す。出発しようとしているバスが止まっているのを見つけた。外からバスの中を見ると満席に近いほどたくさんの登山者がバスの出発を待っているようだった。私は昨日に購入しておいた帰りの分のチケット三人分をザックから取り出しバスの入り口に立って乗せてくれるのを待っていた。係員は私たち三人が乗れるかどうか座席数を確認していた。そしてＯＫの声が掛かり我々は乗車した。座席は補助席の前から３，４，５個目の席に三人が座ることができた。ほっとする暇も無くバスは走り出し富士北麓駐車場へ向かった。雨に濡れながら歩き続けバスを待つことなく乗車ができたことが幸運だった。バスの中は暖かく雨に濡れた冷えた身体を和ませてくれた。疲労が蓄積して到着までに寝てしまうのかなと思っていたがそうでもない。私の隣に座っている男子２人の会話がやけに大きな声を出している。大学の学生と講師のような組み合わせのような会話だった。講師が自慢げに学生に話をしているのが鼻につく。それが原因で眠れなかったようだ。私の前には、次男の洋介が座っている。洋介の隣の客が頭をもたげている。それが洋介の肩にのしかかり私は洋介の隣の客の頭を押さえて洋介の肩から離す試みをした。しかし隣の客はそんなことも知らずに頭を洋介の肩にもたげて眠り続ける。何度か私は試みたがうまくいかなかった。洋介もそんなことは知らずに眠り込んでしまったようだ。３０から４０分の乗車だったように思う。駐車場に到着して私たちの車へと向かう。まだ雨は降り続いている。登山を終えて身体は、汗をかいて下着が多くの水分を含んでしまった。車の外の後ろ側で上半身を裸になって下着を着替えるのだが雨粒が裸になった皮膚に当たり、冷たさと痛さを味わいながらの着替えだった。着替えが終わって直ぐにその場を後にした。息子２人が前のシートに座り、私は後ろに座った。３人分の登山の荷物が荷台だけでは収まらず、後ろの座席にも乗せることになったため、私の座っている脇の座席は荷物がいっぱいだ。リクライニングシートになっているが、荷物が邪魔をしてシートを傾けられない。窮屈な体制ではあったが、移動している車の中で直ぐに私は眠りに落ちたようだ。目を覚ますと、大祐の職場の寮の駐車場だった。長男の大祐が運転を受け持っていた。大祐は東京の杉並区にある会社の寮に住んでいる。私は大祐が東京でどんな寮の暮らしをしているか見てみたかったが、眠気が勝って大祐の部屋まで移動する元気がない。大祐の荷物を車から出し終わると直ぐにいわきに向けて出発した。今度は私が首都高速走行を担当した。常磐道へ入って守谷ＳＡで休憩してからは、洋介の運転となる。しかしそれも友部ＳＡまでだった。洋介はどうしても眠くて運転できないと言って運転の交代を要請された。そして私が自宅まで運転して無事帰宅した。富士紀行をまとめると、以下のようになる。２０１７年８月１４日いわきの自宅を午前１０時に３人がパジェロ（洋介の車）に乗り込み出発する。６時間かけて富士北麓駐車場へ到着する。その間に東海ＰＡと守谷ＳＡで休憩を取る。１６時から駐車場の車中で仮眠したりしながら１８時半まで待機する。シャトルバスに乗り１９時４５分富士スバルライン五合目に到着。２０時４５分に登山を開始する。富士山頂到着が１５日朝５時。下山してシャトルバスの停留所に到着したのが午前９時２５分。９時半にバス出発。そして帰宅が１７時４５分。３２時間の旅となった。登山をしたのは、久しぶりだった。２０代の頃は兄貴に連れられて東京から電車に乗ってよく登山に出かけた。地元に帰ってきてからは、全くと言っていいほど登山はしていない。現在３０歳を超えた長男は東京で独身の会社員。２６歳の次男は地元いわき市で会社員になって３年目、勿論独身。次男はお盆休暇が少しもらえることになった。そして富士山に登りたいと自宅で夕食を食べているときに言った。妻が「お父さんと行ってきたら」と言って行く方向となった。長男を誘ってみた。直ぐに行くと言うことに決まって長男は、東京から帰ってきた。長男は東京に住んでいて、普段電話もしないからコミュニケーションがほとんど無い。次男は朝６時に出勤して夜１１時を過ぎないと帰宅しないサラリーマン生活をしている。次男ともコミュニケーションがほとんどできない生活が続いていた。富士山に３人で行けることを私は嬉しく思った。ただそれだけの理由で私は富士山登山を決行した。体力に自信があるかないかなど考えもしなかった。息子２人と登山ができることだけ考えた。長男は道案内をしてくれて、私の体力を気遣ってくれた。洋介は富士山登山を提案してくれて、自分の車を登山用に提供した。息子たちに感謝している。今回の登山で富士山への思いは、登って下って無事帰宅はできたがもう少し体力に余裕がほしい。帰宅して２，３日寝込んでしまうのかと心配した。夜に出発して暗い中、懐中電灯での登山だったので登っているときの景色を楽しむことはできなかった。下りは雨降りになり頂上から見る景色が想像していた物ではなかった。なによりも驚いたのは、登山者の多さだった。そんな訳で現在、二度目の富士山登山は考えていない。６３歳になる私は貴重な体験ができた。こんなことは二度と無いかもしれない。しかし登山はどこか静かな山に登りたい。いわきから近いところの半日ほどで往復できるような山にいけたらいいと思う。

１０回生千葉良司